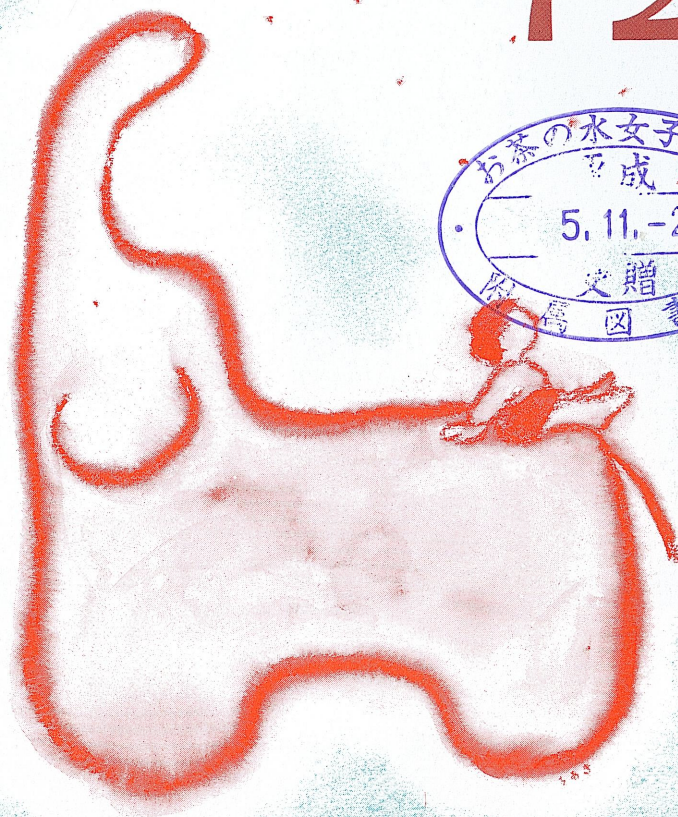


幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993 12



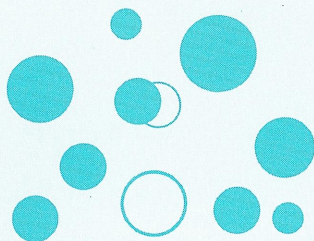
第92巻 第12号 日本幼稚園協会

子どもの持ちあじを生かす 園保育

一人ひとりの持ちあじを生かす園保育の考え方
から実践まで。



早いけれど荒っぽいもの
を作る子、遅いけれどき
ちんと作る子など、いろ
いろな持ちあじの子の実
践例を集めて、指導の基
本をまとめた本です。
個性を育てる保育に悩ん
でおられる先生方におす
めします。



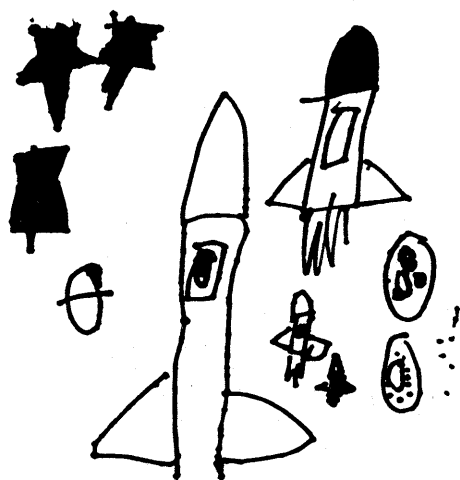
祐宗省三 編・著

A5判・240頁・定価1,700円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



第92卷 第12号

幼 児 の 教 育 目 次 — 第九十二卷 第十二号 —

© 1993
 日本幼稚園協会

普遍性と特殊性

この夏の国際会議から

津守 真 (4)

冬空を見上げて

篠原 正雄 (12)

「見る」ことについて

榊田 正子 (19)

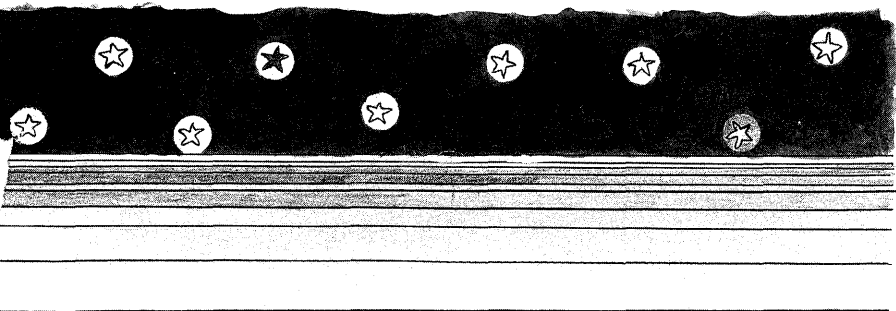
公教育は家庭教育にどこまで関与するか(6)

公教育と家庭教育のかかわり

流田 直 (26)

堀合先生に学ぶ(9)

立川多恵子 (35)



〈本の紹介〉『幼児の笑いと発達』……………内藤 知美…(42)

婦人宣教師、ミセス・プラインの「おばあちゃんの手紙」(11)……小林 恵子…(45)

ある日の育児日記から(36)……………佐藤 和代…(54)

若いお母さんたちへ

我が子らの夜泣きや母離れをめぐって……………小蘭江幸子…(55)

第九十二巻総目録……………(61)

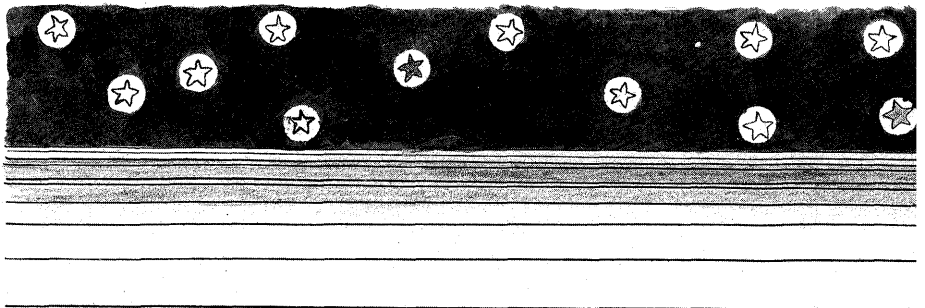
表紙・紺野 千秋／扉題字・堀合 文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／田代 和美

田中三保子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



普遍性と特殊性

この夏の国際会議から

津守 真

一

この夏のはじめ、私は南米コロンビアの幼児教育大会とOMEP世界理事会に出席するためにコロンビアのボゴタにゆき、夏の半ばには、韓国の馬山にある慶南大学の講義、夏の終わりには大阪で開かれたOMEPアジア―太平洋地域幼児教育・保育国際会議と、国際的なことで忙しく過ごした。日本の国が否応なしに、世界へと押し出されてゆく時代

に生をうけて、私共子どもの仕事をする者も、世界と交わることを避けられない。この夏、私は日ごろ考えていることを、外国の人々に話す機会を得て、表現は不十分ながらも、ある程度の理解を得られたように思った。それぞれの国の社会的状況は異なっても、子どもの仕事をする者には殊に人間として共通なものがあることを信じてよいのだと思う。それは、外国の人にとっても同様であ

ろう。私共が共感を表現することによって、その部分は、より一層ひろい範囲に共通なものとなるであろう。忙しい夏の日々の中で、とくに心に留まったレポートのいくつかを紹介したい。

その第一は、コロンビアで元 OMEP 世界総裁のグタールから手渡された、「幼児教育における普遍性と国による特殊性」(The Universal and the National in Preschool Education)で、一九九一年、十二月にモスクワで行われた OMEP 国際セミナーの報告書である。(注)その冒頭に、グタールは、幼児教育において普遍的なもの何かを問うている。「幼児教育学の専門家であるわれわれにとって、子どもの発達の科学は、普遍的な道具である。しかし、西欧諸国においては、この知識は、より一層教育効果を上げるために用いられてきた。このことが、何故、

他の分野の成果をも考慮にいれることが必要になったかの理由である。」とグタールは言う。そして、科学的認識以前に、子どもは小さな人間であり、人類のメンバーのひとりであるという認識こそ普遍的なことであると指摘する。

「幼児は文化を知覚するのに繊細であり、また、その変動にも敏感である。成長と共に、ひとつのあるいは幾つかのコミュニティと自分を同一化し、そして、文化の相違にも気が付いてゆく。」

「違った文化が出会うときに、当該の文化は他との相対的關係の中で見られる。そしてその異なった文化を結び合わせるものは、普遍性である。この文化の媒介をするわれわれ教師は子どもの仕事を通し、また国際的交わりを通し、自分自身の人間的普遍性に立ちもどり、再体験する。不幸にも、多くの大人たち

が、この普遍性と同一化し、それに自分自身を関連づける能力をしばしば失っている。」

「今日、人々は複雑な複合した文化の中にある。こういう状況の中で、文化の同一性を保つには、他からの分離を考えるのではなく、他の文化やコミュニティとかかわりつつ、特定の文化の中で生きるのである。子どもたちは、この開かれた創造的なプロセスの積極的な担い手である。」

このように論じてきて、グタールは、OME Pの観点から、次のように述べる。

「このことのために、OME Pは子どもたちが次のようなことができるようにと試みる。」

1、過去、現在、未来の異なった文化の中に人間性を認識し、実現すること

2、地球上に存在するすべての人や、すべての物との連帯の感情をつくること

3、子どもも、私共自身も「人類の担い

手」であるという自覚と自己実現の力を発達させること」

私は、この夏、二年後のOME Pの世界大会のテーマについて考えつづけていたので、この最後の一節は、ことさらに印象深く読んだ。今度の世界大会のテーマには、「人間を育てる」ということが強調されている。月並のようであるけれども、歴史と文化の中に人間性を発見し、子どもと私共自身も、それを守り育てる担い手である自覚をつくることは、保育の基盤であると思う。

このモスクワのレポートの中の多数のものが、ロシアおよび近隣諸国と東欧諸国の人々によるものであるが、その大部分が遊びを強調し、人間的成長に価値をおいていることはこのレポートの特長である。たとえば、モスクワの幼児教育研究所のニコライ・ボディア

コフは言う。「ロシアの幼児教育プログラムの基本原理の中で最も重要なことは、子どもの成長、パーソナリティー、創造性を尊重することである。……これは幼稚園における教育と保育 (upbringing) のプロセスを豊かにする。……伝統的には、芸術的発達は芸術についての知識や技術の獲得を意味した。しかし、それとは逆のことがいま起こりつつある。固定した規律を変容すること——枠から出て、新しい未知の分野へと足を踏み出してゆくこと、新しい規準と美のモデルを創ることである。」

同じくモスクワの幼児教育研究所のジェナ・デイ・クラフトソフは言う。「新しい教育原理は、家庭保育 (family upbringing) の優先である。公的な幼児教育は家庭の補助機関である。……かつて教師は教育のプロセスの中心に位置していた。すべての活動は教師

によってコントロールされていた。……しかしわれわれは、子ども自身の経験にもとづいた子どもの活動を励ます。イニシアティブは、子どもたち自身にあるのであって、教師にあるのではない。われわれは、熱心で、利己的でない、創造的な教師を必要としてい



る。」

リトアニアの教育研究所のヴィタリア・グラツェーネは言う。「幼児教育の内容とプロセスは、人間的になされねばならない。もっと民主的になされねばならない。そして子どもが必要にもっと即応してゆかねばならない。……幼稚園が伝統的なやり方をやめるのは困難なことである。しかし、われわれはそれをせねばならぬ。そして、子どもたちが世界の一致と調和を実現してゆくのを助けねばならぬ。」

このような論調でレポートはつづいてゆく。日本の新聞でみると、崩壊した旧ソ連諸国の経済的困窮のみが語られる。しかしその困難な生活の中で、人間を尊重し、人間に焦点をあてた教育が着実に進行しつつある。コロンビアから帰途の飛行機の中でこのレポートを読みながら、この国々の二十年、

三十年後の発展を想像し、また、子どもを育てる仕事にたずさわる人々の底辺に流れる人間性を感じて、豊かな気持ちになった。

二

コロンビアで、一日、OME Pの前世界総裁バルケが、小さな集まりで、「子どものときに、何故、遊びが大切なのか」という題で話された。それは私共が幼児の保育の実践で経験していることをよく言いあてていた。

「子どもたちと交わり、子どもたちが自由に自己表現するのを許される状況での子どもを見る者はだれでも、遊ぶとはどういうことかを知っている。その同じ遊びが、しばしば、何か別のもっとよいものに到達する手段と、大人たちの眼には映っている。学習を高めるように、子どもたちを遊ばせなければならな

いという教育学説がしばしば聞かれる。そういう説明をしないと遊びが受け入れられない。これでは、遊びを、目標に到達させる活動のひとつにしてしまう。遊びは、子どもにとってひとつの方法としての意味しかもたないであろうか。」

こういう問いから始まって遊びをいろいろの角度から定義づけて後、バルケは、具体的な自分の経験に言及する。

「私は幼稚園や保育所の場面からはなれて、家庭に目を移そう。時間が構造化されず、生活がゆっくりと流れる家庭の場面で、子どもたちは最も元気に遊ぶ。私は、三人の男児の母親として、またひとりの女兒の祖母として二重の喜びを体験した。この女兒はあるとき両親とバリ島に旅行した。バリにいったことのある人は、あの踊りの色彩や音に印象づけられるだろう。その子は、ホテルの居

間にもどるや、その印象を再現することに熱心に取り組んだ。あらゆる布を持ち出し、違った色のバンドを用いて着飾り、その踊りを再現するのに祖母を引き込んだ。一時間もたっふりと踊った後、突然、祖母を着飾らせ、役を交代した。……」このことから、更にバルケが幼稚園の先生をしていたときの同様の体験に言及する。「子どもたちは学習していたのか？ たしかに、彼らは一緒に仕事をすることを学んだ、そして同時に、彼らは楽しんだ。……大人がかかわるとき、大人はしばしば遊びをこわしてしまふ。」

このような遊びの過程が語られるのを聞くと、これはどこの国にも共通の保育の事実であることを悟られる。それは子どもの中にある人間としての普遍性に由来する。

三

この夏、八月二十三日から二十六日まで、

大阪で、OMEPアジア―太平洋地域幼児教育、保育国際会議が開催された。大阪の幼稚園、保育園の方々のご努力によって募金もなされ、アジア二十二か国がこれに参加した。

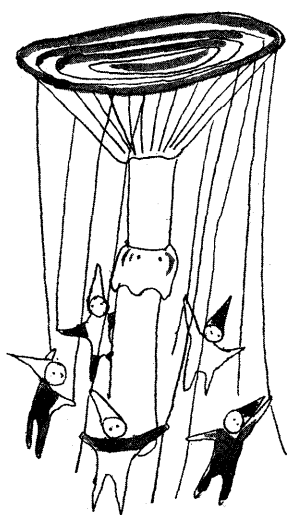
こんなに多くのアジア諸国の保育関係者が一堂に会したのは、おそらくはじめてのことではないだろうか。一晚、インターナショナルの夕べには、各国から歌や踊りが披露された。繰り返し多い踊り、歌の調子などをみているうちに、私共の文化の源流にもどってゆくような気分になった。アジアの人たちの集いにはある種の親近感がある。それと共に、近年の歴史や現状を思うとき、心が痛んだ。最終日、アジア代表者のシンポジウムるとき、ベトナムの代表の人が次のようなこと

を言った。日本も、四十数年前には貧困と社会的混乱の中にあった。四十年の間に、どうしてこのように繁栄するに至ったのか、幼児保育関係者として日本人に教えてほしいと。私はとっさに、ベトナムはいま経済的に貧困かもしれないが、精神的には豊かなのだと思う、日本は物質的に裕福かもしれないが、四十年前の困難な時代の精神的豊かさを失ってしまった。もう一度その原点に立ちもどって、一緒にやってゆきたいという趣旨のことをのべた。これらの国の人々に経済的援助が必要なことは言うまでもないが、それ以上に、精神的励ましを必要としているのだと思う。子どもの仕事をする者は、子どもと社会の中間に立って子どものために戦っている。そのことは、何処にあっても共通のことである。どうすればよいかはそれぞれの社会状況によって異なるけれども、人間が生きや

すい生活を、今日は実践の中でつくる努力をしていることは、保育者に共通であらう。

日々の保育の実践者にとっては、国際的なことは無縁なようにみえる。しかし、その日々の生活にこそ、世界中の保育者を結び合わせる普遍性がある。

(愛育養護学校)



注 The Universal and the National in
Preschool Education, Papers from the
OMEP International Seminar, Moscow,
4-7 December 1991, published by
OMEP World Organization for Early
Childhood Education and UNESCO,
The YCF Project, UNESCO, 7 place de
Fontenoy, 75352 Paris 07SP, France.

冬空を見上げて

篠原 正雄

木枯らしの夜はゆっくり空を眺めるには少し寒いのですが、凍てつく空を飾る冬の星座の華麗さに比べられるものではありません。冴えた星空を見上げてみると、いったい自分は何者なのかと不思議に思うことがあります。星とともに生きた古代の人々の深い思いは星座の伝説を生んできました。三歳児に、

「空の向こうも空なの？ そのずっとずっと向こうもまた空なの？」と問われたことがあります。時代が進んでも、子供が大人になっても、宇宙は不思議です。

冬至の前後の東京では午後四時半に日が沈み、二時間ほどで真っ暗になります。この冬は毎月半ば頃に新月になりますが、月明かりのない新月で、夜の長い冬至に近く、双子座流星群の極大の日でもある十二月十三日の夜を想定して星空の散歩に出かけましょう。

土星

この冬は、惑星の多くは太陽の向こう側にいて、よく見えません。しかし、十二月の日没後の西の空

には土星が残っています。周囲に明るい星がないのですぐわかるでしょう。

他の星（恒星）の光は地球の大気の乱れにより、ろうそくの炎のように瞬くのに対し、惑星である土星は同じ明るさでじっと輝いています。惑星は肉眼では点のようでも、大気の揺らぎと比べれば十分な面積をもっているので瞬きません。

土星は木星の仲間（木星型惑星）です。彼等の特徴の第一は巨大であること、第二は、水素とヘリウムという軽いガスでできていることです。深いところでは圧力で液体に変わります。地面はなく、表面はアンモニアの雲です。水素とヘリウムは、太陽や宇宙空間の主成分でもあります。四十五億年前、銀河系のどこかで宇宙組成の物質が集まって星雲となり、その一部から太陽系が生まれました。土星や木星は、太陽系の母なる星雲を偲ばせる天体なのです。

双眼鏡があれば、土星の環が見えます。環は無数

の水のかけらからなっています。全ての木星型惑星は環を持っていますが、簡単に見えるのは土星だけです。

土星には名前のあるものだけで一八個の衛星がありますがほとんどは岩や氷の小衛星です。けれど、最大の衛星タイタンは、水星よりも大きく、小望遠鏡で簡単に見えます。タイタンは有機物粒子を含む光化学スモッグに覆われ、氷の地殻の上に窒素を主成分とする濃い大気があります。また、メタンが地球の水と同じような役割を果たし、メタンの海、雲、雨、川の存在が予想されます。水の代わりをメタンがとめる生物がいるとしたら……と想像してみても楽しいものです。

天の川と星座

空の暗い所では、W字形のカシオペア座からオリオン座の傍らへ夜空を横切って流れる天の川が圧巻です。初めて見ると雲と間違えることもあります

が、雲の中なら少ないはずの星が逆に周囲よりたくさんあるのでわかります。

日没後の西の空にはアンドロメダ、ペルセウス、ペガサス、鯨、ケフェウス、カシオペアなど、エチオピア王家にまつわる壮大な神話に登場する秋の星座が残っています。

東の空では、天の川の少し南のオリオン座を中心に、周囲の星座にも、たくさんの一等星、二等星がちりばめられ、冬の星空を華麗なものにしています。このあたりは、現在星が生まれている領域です。このことと、明るい星が多いことは、深く関わっています。

銀河系

星空には果てがあります。私たちが見る星空の全体が銀河系で、数千億の星が、中心部が膨らんだ直径十万年の円盤の形に集まっています。円盤に添った方向では遠方の淡い星までみえます。これが

天の川です。

銀河系の外の星のない空間を超えると、別の銀河系に着きます。西の空に肉眼でもぼーっとかすんで見えているアンドロメダ銀河もその一つです。二三〇万年かなたの、もう一つの星空、別の天の川です。このような天体を、本来天の川をさす語を転用して「銀河」と呼びます。宇宙には何千億もの銀河があると見積られています。

台風のように渦巻いている銀河の写真を見たことがあるでしょう。渦巻き状の「腕」こそ、星の生まれる場所なのです。私たちの銀河系にも渦巻き状の腕があります。

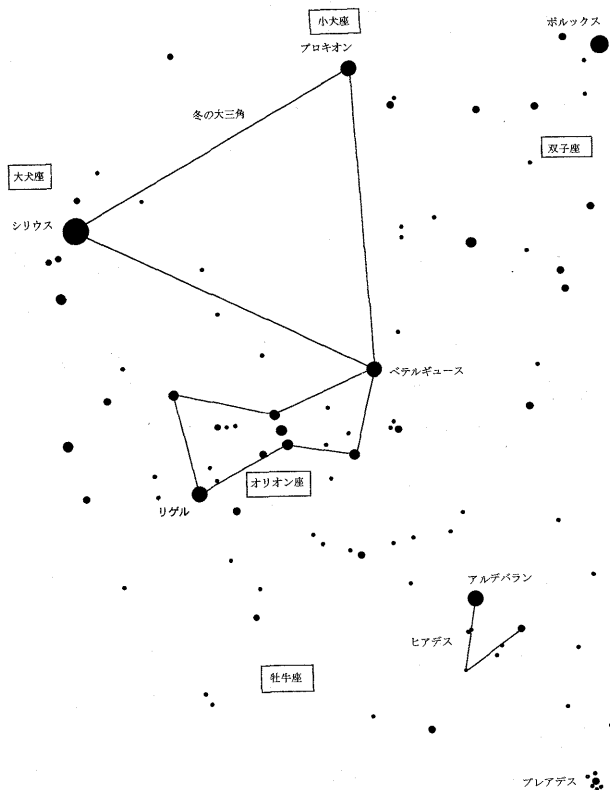
冬の空には、二つの渦巻き腕が見られます。一つは、太陽系が通過中のオリオンの腕、もう一つはそのすぐ外側のペルセウスの腕です。オリオンの腕に属する星々は、われわれ自身がその中にいるわけですから、あらゆる方向に見られます。夏の白鳥座や冬のオリオン周辺の明るい星々の多くが、そのメン

バーです。

散開星団

牡牛座にプレアデスという星の集まりがあります。肉眼で六つほど、望遠鏡ではさらに数百個の若

い青い星が集まっているのが見えます。距離は約四〇〇光年です。若いといっても五〇〇〇万歳です。このような星の集団は散開星団と呼ばれます。全体を覆う星雲が星の光を反射して青く光っているのです。肉眼でもボーッとにじんで美しいものです。



日本名は「すばる」で、清少納言も「星はすばる」と推薦しています。ハワイに建設中の大望遠鏡の愛称にも採用されました。

プレアデスとオリオンの中にV字形の星の並びがあります。星数一〇〇、距離一五〇光年のヒアデスという散開星団で、牡牛の顔にあたります。七億歳くらいですが、太陽の四十五億歳と比べればほんの子供です。V字の端のオレンジ色の一等星アルデバランは距離六〇光年で、メンバーでないものが偶然重なっているだけです。

ペルセウス座のカシオペアより、天の川が一部分濃くなったような塊が見えます。七〇〇〇光年余り先の二つの散開星団が重なって見えている「二重星団」です。こちらは本当に若くて、七〇〇万歳の幼児です。

獵師オリオンは東に大小二匹の獵犬を従え、西の牡牛と戦っています。オリオン座は、リゲル、ベテルギウスの二つの一等星と、有名な三ツ星などの

くつかの二等星を含む見事な星座です。

ベテルギウスと、大犬座のシリウス、小犬座のプロキオンの三つの一等星を結ぶ三角形は冬の大三角と呼ばれています。シリウスは太陽を別とすれば、全天で最も明るい恒星です。ただし、これは私たちから見た見かけの明るさです。本当の明るさは、シリウスは太陽の二〇倍程度ですが、ベテルギウスは太陽の一万倍以上明るいのです。しかし、シリウスは距離八・六光年と近く、ベテルギウスは五〇〇〇光年と遠いので見かけではシリウスの方が明るくなります。

オリオンの三ツ星の下に小三ツ星があります。その真ん中の星は青くにじんでいます。オリオンの大星雲です。一五〇〇光年のかたにあるこの星雲は、極めて若い（一〇〇万歳）明るい青い星々の紫外線を吸収して、赤く光っています。赤外線や電波で見ると、大星雲の奥に濃い暗黒星雲があって、その中で、たった今、新しい星々が生まれているのが

見えてきます。星に包まれた新生児や、母胎の星雲の奥深くの胎児の群れまでわかります。星はこうして、濃い星雲から集団で生まれます。興味深いのは、母星雲の中に生命の材料の有機分子がたくさん見つかったことです。彗星や隕石の有機物質もその名残かもしれません。

一〇〇〇万年以上にわたる数波の星生成で生まれた星々がオリオン座を創っています。同じ様な星のゆりかごは牡牛座、ペルセウス座など、天の川沿いにいくつもあります。

牡牛座T型星と呼ばれる一群の天体は、太陽程度の質量の生まれたての星です。星は誕生のとき、一瞬（たとえば千年間）とても明るくなります。いわば産声です。これらの天体は、四十五億年前に産声で母星雲を吹き払い、現在の惑星の軌道上では岩や氷の塵が集まって惑星となっていた頃の太陽系の姿をしているといわれています。

双子座流星群

星々を見上げていると、時折スーッと流れていく流星に気づくでしょう。今夜は、双子座流星群の極大の日。夏のペルセウス流星群と並び、一年中で最も流星の多い夜の一つです。

流星の正体は、宇宙から地球に飛び込んでくる塵です。高速で飛び込んできた塵は上空の希薄な空気と摩擦して蒸発し、一瞬の間輝くのです。

地球から見て双子座の方向から塵の群れがやって来るのが双子座流星群です。流星は全天で流れますが、流れを逆にたどると、双子座の中のある一点に至ります。

流星群の塵は彗星からきたと考えられています。惑星の他にも、太陽の周りを回る小天体は無数にあります。岩石等からなるものを小惑星、揮発成分を多量に含む氷天体を彗星と呼びます。

彗星は太陽系の外側で生まれ、四十五億年を生き延びてきた天体であると考えられています。彗星の

氷には有機物質が多量に含まれているようです。普通は太陽から遠いところにいますが、太陽に近づくと、氷が蒸発してガスとなり、氷に混ざっていた砂粒のような塵と共に噴き出します。これが太陽の光圧や、太陽から吹いてくる風を受けて、太陽と反対方向に伸びるのが、いわゆる彗星の尾です。こうして放出された塵の群れは、母彗星の軌道の近くに分布して太陽の周りを公転します。その軌道を地球が横切るとき、流星群が出現します。多くの流星群について、その母彗星が知られています。

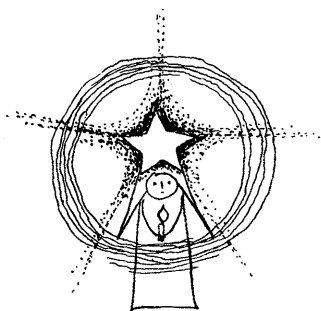
双子座流星群の母天体は、十年前に小惑星として発見されフェートンと命名されました。氷が蒸発した彗星にもしも岩石の核があれば、小惑星とされるでしょう。ある種の小惑星は彗星起源という説もあります。地球や生命の起源とつながる小天体ですが、まだわからないことだらけです。

一瞬輝いて消えてしまう流星はいかにもはかなく、昔から滅亡のしるしと考えられました。けれ

ど、仲間に四十五億年遅れて今ようやく惑星の一部となろうという出会いの輝きでもあります。流星に「ようこそ」と言ってみませんか。

長かった夜が明けます。太陽が昇ってきます。一月初めに地球は太陽に最も近づきます。そういえば、太陽が少し大きい気がしませんか？ 家に戻って暖をとり、お休みなさい。

(駒沢大学)



「見る」ことについて

梶田 正子

しばらく前から興味があって、一歳児がいる家庭を訪問し、お母さんと子どもの日常生活を見ていただくことがある。職場が休みの時期にしか行かないので、年に一、二回のことではあるが、どこの家庭でもそれぞれに生き生きとした関わりが展開されていて、とても楽しい。ふだんの生活なので種々の場面があり、母親と子どものコミュニケーションの中に興味深い要素が色々あるが、子どもの「見る」という行為もそのひとつである。

△Nちゃん（一歳一か月）の例から▽

クレーピーペンシルを一本持って遊んでいる。傍に、お絵かきノートとふたの開いたクレーピーペンシルのケースがある。

N 立ち上がり、クレーピーであごの下をいじりながらゆっくりおもちゃ箱の所へ行く。

母 クービーのケースを閉じる。

N お絵かきノートの所へ戻る。閉じたケースを見て、持っていたクービーを手放し、ケースを持ち上げようとする。

母 ケースを手にとる。

N 母の動作を見ている。

母 ケースを開いて、Nの前に置く。

N 嬉しそうな表情で、両手でケースを持ち上げ、閉じるようにする。ケースを傾けたので中のクービーが数本はみ出して、ケースにはさまった状態となる。

母 「ア、アーア」

N 手をとめて、クービーがはみ出した状態のケースを見つめる。

N さらにケースを持ち上げる。クービーが数本、下にこぼれ落ちる。落ちたクービーを見る。

N クービーがはさまったままのケースを無理に閉じようとする。

母 「はさまってるの。こわれちゃう。」ケースに手を添えて下に置かせ、はさまっているクービーを納めて、Nの前に開いた状態で置く。

N 母のすることを見ている。

N ケースの中のクービーを取り出そうとするが、うまくつまめない。

N ケースを持ち上げる。中のクービーが全部こぼれ落ちる。空になったケースを見てから、下に落ちたクービーを見る。

N 右手に空のケースをブラブラさせながら持ち、左手で落ちたクービーを二本拾い上げ、ケースとクービーを交互に見る。

母 「アーア」

N クービーを手放し、ケースを左手に持ちかえ

る。その際に自然にケースが閉じて軽く指がはさまる。

N あわてて指を抜き、ケースを見つめる。

(以下略)

*

たった数分間の様子であるが、自分の行動やその他の結果として変化した状況、またその場で関わる母親の行動を、実によく見ており、自分なりに対応しようとしていることがわかる。

△S君（一歳二か月）の例から▽

S 鉛筆を手にとって、傍にあったアルバムに書くようにする。

母 「そっちは書かなくていいの。こっちに書いて。」と、お絵かきノートを示す。

S ノートに書く。

母 「そう、そう。」

S すぐやめて、アルバムの表紙をしばらく見てから、発声しながら表紙に書く。

母 「そっちに書きたいの。こっちでしょ、こっち。」お絵かきノートを指さす。

S 「コエ、コエ」と言いながら、母を見上げ鉛筆で絵本をさわる。

母 「でんしゃには書いちゃだめだよ。」絵本やアルバムを、Sから少し遠ざける。

S 母の行動を見ている。

母 「はい、どうぞ。」Sの前に、ひろげたノートを示す。

S ノートに書く。
(途中略)

S 座ぶとんに鉛筆で書くようにする。

母 「そこ、おふとんに書いちゃだめだよ。」と座ぶとんをどける。

母 Sを見ながら「これ、ないないしよう。ない

ない。」「ないない」を繰り返しながら座ぶとんを押し入れに片づける。

S 母の行動を見ていて「ナイナイ」と鉛筆を差し出す。

母 「これもないしないするの。じゃ、ないないして。」押し入れをしめるのを待つ。

S 鉛筆は押し入れに入れない。「ニヤイニヤイ」と言いながら、押し入れをしめる。

(途中略)

S 鉛筆を持ち上げて、ひろげてある絵本に書く。

母 Sの行動を見ながら、「アーアー、みんなジージ書いちゃって……まあまあ。」諦めたような口調で言う。

S 横にあったアルバムの表紙裏(白い部分)にも書く。書きながら発声し、母を見上げる。

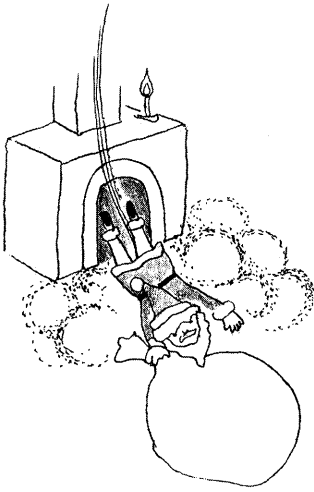
母 Sの手の動きに合わせて、半ば嘆くような口

調で「アーアーアーアー」

S アルバムの写真の上にも書こうとする。

母 あわてて、Sの腕をつかんで制止する。

「あ、こっちは書かないで、だめ、いや。」



S 腕をおさえられて、不安な表情。

母 「これはお写真の上、書きちゃだめだよ。

S、ね。」と言いなから、Sの腕をはなす。

母 Sが鉛筆で書いた写真の上を、手で拭うようにする。

S 母のすることを、じっと見ている。

母 「ないないしようね。もうね。」アルバムをとじて、棚にしまう。

S 母の様子を見る。畳の上に鉛筆で書き始める。

母 「ここにしないでよね。」「ジージ、こっち書いてよ、こっち。」ノートをSの前にひろげ、白いページを探す。

S 母の動作を見ている。

母 「ほら、はい、はい。」何も書いていないページをSの前にひろげる。

S 母がひろげたページに書く。

S 「ドジャ―」と絵本の上に鉛筆を移し、母を見上げる。

母 「ウーン、そこに書きちゃって……。」諦めた調子で、Sを見る。

母 Sのうえにも、はみ出して書く。

S 「ここはだめでしょう。」Sの手から鉛筆を取り上げて、ノートの上に置く。

母 鉛筆で書いてしまった畳の部分を見る。

母 軽く笑いながら、Sが書いた線を拭き取るように、畳をなでる。

S 畳を見ている。

母 Sが書いた部分を指さしてこすりながら「ここ書きちゃだめなんだよ。S、ほら、書きちゃだめなの、ジージ、ここは。」

S チラッと鉛筆を見るのが、母の手の先を黙って見ている。

(以下略)

*

鉛筆を手にして何にでも書きたい子どもに、書いてよい所、書いてはいけない所の区別が示されていく。Sの母親の話によると、初めの段階では、どこにでもいたずら書きをしてしまわないように牋のひとつとして子どもに与えようとした基準だが、言ってもやめないいたずらは禁止するとかえってしようとする傾向があるので、途中から、限度にもよるがやらせておくことにし、そのかわり絶対にいたずらをしてほしくないものは手が届かない所に置くことにしたとのことである。母子の関わりの中で互いに相手の行動を見ることによって、小さな葛藤や相手への期待等を含んだ微妙な調整を体験しながら、価値が導入されて行くプロセスがうかがわれる例である。

△Mちゃん（一歳三か月）の例から▽

- | | | | | | | | | | | | |
|------------|-------------------|------------|----------------------------|------------|-----------------|---------------|---|---|---|---|---|
| 母 | 母 | 母 | 母 | 母 | 母 | 母 | 母 | 母 | 母 | 母 | 母 |
| 「測ってくれるの。」 | 伸ばした巻尺を母のおどこにあてる。 | Mの様子を見ている。 | 巻尺を受け取り、巻尺の端を引っ張ったりしていいじる。 | Mの動作を見ている。 | Mの目の前で巻尺を縮めて行く。 | わってちゃ測れないわよ。」 | 「測ってあげる。」伸ばした巻尺をMから受け取って、Mの背丈を測ろうとする。「さ | 「測ってあげる。」伸ばした巻尺をMから受け取って、Mの背丈を測ろうとする。「さ | 「測ってあげる。」伸ばした巻尺をMから受け取って、Mの背丈を測ろうとする。「さ | 「測ってあげる。」伸ばした巻尺をMから受け取って、Mの背丈を測ろうとする。「さ | 「測ってあげる。」伸ばした巻尺をMから受け取って、Mの背丈を測ろうとする。「さ |

M 卷尺を母に渡す。

母 「スーって。」と言いなから、Mの目の前で

卷尺を伸ばし、次に縮める。

M 母のすることをじっと見ている。

M 卷尺を受け取って伸ばす。伸ばした卷尺を自分の首やおでこにあてる。

母 Mが持っている卷尺を、Mの足先から頭の上まで伸ばして背丈を測ろうとする。「そこを

持っていると測れないわ。」

母 「巻いて」

M 卷尺をいじっているが、やがて卷尺を置いて立ち上がる。

母 卷尺を縮める。

(以下略)

*

この例は、母が目的を持って卷尺を使おうとしたが、Mの目が覚めた為に、以前したことのある

卷尺の伸縮の遊びを子どもとしようとして、母が意識的に始めたやりとりである。卷尺を縮めることはまだできない様子であるが、こうした遊びの中で道具の扱いや技術が獲得されていくのであることが想像される。

見て感じる、見て気付く、見て思い出す、見て想像する、見て体験して理解する、等々我々の日常生活のあたり前の行動であるが、発達のめざましいこの時期に、信頼に満ちた母子の関わりの中で、子どもが母親を、またその状況を、こんなにも注視しているということは、当然のこととは言え興味深い。一人の子どもの発達という視点からのみならず、最近よく耳にする「家庭における生活文化の伝承の乏しさ(様相の変化)」等の視点からも、私には思うことの多い事実である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

公教育は家庭教育に

どこまで関与するか(6)

公教育と家庭教育の かわり

流 田 直

一、いまの子どものくらしから

(1) 子どものくらしを追う

学校教育の中で家庭生活や家族とのかかわりについて触れる場面はあまりない。生活科、家庭科、道徳、特別活動の一部等に見られるが、子どもたちの意識は低い。あまりにも身近な事柄で意識することもなく過ごしているからである。また、学校社会は生活を持ち込むことなく、独自の子ども社会によって営まれている。教師も家庭の諸問題を背負っている子としてはとらえず、目の前の子どもの姿でとらえようとする。

学校で家庭についてふり返らせると戸惑う子どもが多いが、高学年にもなると、今後の生き方や自分自身を考えさせる学習も大切である。家庭科の学習で生活時間を調査し、それを元に家庭生活や家族とのかかわりをふり返らせて、家族の一員としての自覚をうながす指導を試みている。

図1は本校の典型的な子どもの生活時間調査の事例で

▼ 図 1

自分と家族の生活時間

6年 | 組

調査日 平成5年 4月 19日 (月) (平日の一日を選ぶ)

AM												PM												AM																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
5		6		7		8		9		10		11		12		1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		1		2		3		4																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
私	睡眠	朝食	通学	小学校										通学	勉強	入浴	夕食	勉強	自由	睡眠																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
姉	睡眠	朝食	通学	中学校										クラブ	通学	夕食	勉強	自由	睡眠																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
妹	睡眠	朝食	通学	小学校										通学	自由	夕食	勉強	睡眠																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
母	睡眠	朝食	洗濯	洗い	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	洗濯	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食</

ある。

夜ふかし、睡眠不足、遊びや手伝いの時間が少なく、家族団欒は休日にししか取れない等調べた結果で話し合うと、多くの子に共通した問題が浮かんでくる。

年ごとに子ども自身の自由な時間は減少し、家族がそろう時間も少なく、本来の家庭の機能が様変わりしてきている。

(2) 子どもの家庭生活のようす

これは単に本校独自の問題というより、日本全体、特に都市社会の子どもの生活に顕著である。

図2は本校の資料、表1はモノグラフ・小学生ナウに掲載されていた各国都市社会の子どもの比較である。

この表を見ると、国によって子どもや親の生活意識や実態が異なっているのがわかる。遊びのようすを見る限りでは日本の子どもが少なすぎるようではないが、手伝いになるとやっている子の割合がかなり低い。福祉国家といわれるスウェーデンの子どもの低いのも目立つ。

▼ 表 1

夕食の様子

	孤食率	全員で	父親のみ不在 (%)
東 京	4.6	40.7	39.3
ハルビン	3.3	75.4	16.6
サクラメント	4.6	77.4	8.5
ストックホルム	10.5	64.7	13.4
オークランド	8.2	65.9	12.6
バンコク	7.1	67.4	17.8
ソ ウ ル	5.0	55.2	29.4
タイペイ	1.7	73.5	16.6

○ → 最大値と2位

昨日、下校後友だちと遊んだか

— 遊ばなかった子の% —

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
(%)	62.3	85.5	49.4	68.2

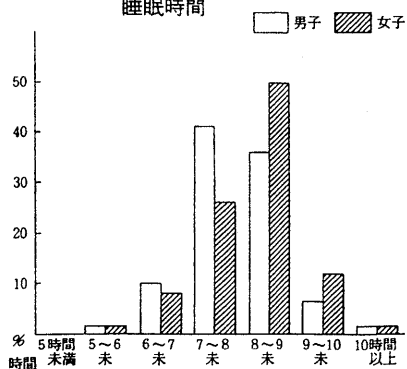
家事の手伝い (毎日する割合)

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム	オークランド	バンコク	ソウル	タイペイ
(%)								
洗濯	1.7	3.5	6.5	1.0	4.4	9.7	3.2	2.1
夕食の買い物	2.4	6.4	7.1	2.4	7.3	8.5	10.2	8.9
庭や玄関の掃除	2.7	6.0	3.6	1.3	3.2	11.3	—	—
部屋の掃除	4.3	17.8	19.3	4.5	19.3	22.0	30.3	11.0
皿洗い	5.0	18.6	13.4	4.3	31.0	28.1	7.5	5.8
夕食の手伝い	6.4	4.5	15.8	2.7	13.7	7.6	6.6	7.6

— = 質問項目なし

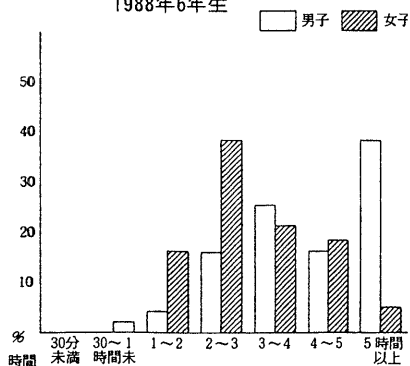
▼ 図 2

睡眠時間



家庭学習時間 (塾の往復も含む)

1988年6年生

父親の不在時間 (就
労・通勤時間含む)

不在時間	割合 (%)
9時間未満	5
9~10時	2
10~11時	13
11~12時	18
12~13時	11
13~14時	11
14~15時	8
15時間以上	19
その他(出張等)	9
母就労数	8名

一方アメリカの子どもは皿洗いや夕食の手伝いをよくやっていることから、生活水準の高低によるといふよりは、親の子どもを育てるためのしつけや態度、つまり家庭教育観のちがいによるものと考えられる。次代を担う子どもに小さいうちから労働の大切さや家族の一員としての役割を持たせようとする親の態度のちがいによるのだろうか。

日本もこのあたりを真剣に受けとめる必要があるだろうである。

どんなに家事労働が機械化され減少したといっても家族の一員であるという自覚を持たせるためには家事労働の分担は意義があるし、労働という体験から学ぶものは大きい。

日本の子どもが無器用になったとよく言われるが、このあたりの日々の積み重ねも大きな原因かもしれない。

夕食の様子から日本が際立っている点が表れている。父親不在のスタイルが当たりまえになって久しいが、これはやはり考え直さなければならない。確かに勤

勉に働く姿そのものであるわけだが、家庭や家族を考えるところの方向は気がかりである。アメリカなどでは仕事を一時中断しても夕食時は父親が顔を見せると言われているが、数値からも納得できる。人間関係を保つ努力がうかがえる。

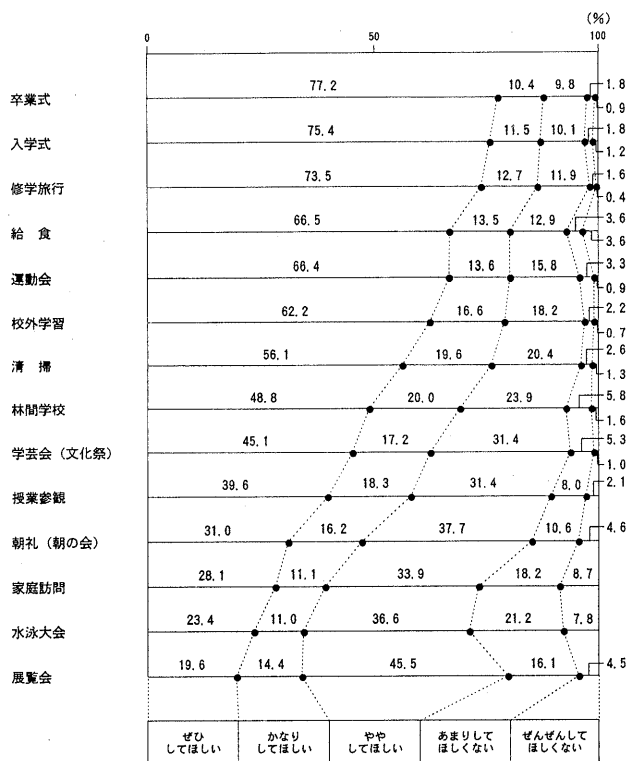
再び本校の場合の図2にもどるが、父親の一日の不在時間を見ると山が二つ見られる。

しかも十五時間以上の方が高い。働き過ぎのお父さん像が浮かぶ。家庭においては母親が父親役もせざるを得ない状況である。その上、競争社会に生き抜くために学業成績を上げることに目が向けば子どもはどうなるか、表の示す通りになってしまう。遊びを奪われ、家事からも遠ざけられ、ただ勉強勉強と追いやられて忙しい毎日を送っているのである。

こうした風潮を断ち切るためには、どこから手をつけていったらよいのであろうか。

教育に携わる身としては悩みばかりである。

▼ 図3 学校行事でしてほしいこと



モノグラフ、小学生 Vol. 13-2

二、公教育のかかえる問題

(1) あれもこれも学校に求められる

くらしの変化によってもたらされたさまざまなひずみやゆがみは、公教育の機能低下や力量不足としてとらえ

られがちである。

本来、しつけや心の成長にかかわる部分は家庭教育が主力であったが、社会の変化や家庭教育力の低下に伴い、学校教育に求められるようになった。

学校が児童生徒の体から食事まですべてにわたって細かくかわってきているのは事実である。

親も他者に依存する方がラクで、安価な学校任せで、満足しているところもある。

こうした現象は何も近年に始まったことではなく、学校が地域のコミュニティの中心であった時代から受け継がれてきている。図3を見ると親の学校への要求度の状況がうかがえる。

しかし、一方で学校教育に

すべて任せて満足しているわけではない。期待されていない部分も年々増加してきている。

特に、校則の問題は学校の過干渉という形で受けとめられ、管理教育という望ましくない言葉で責めたてられる。

校外でおきた様々な悲劇でも校長や責任者が詰問を受けたりするといった現状がある。

学校と家庭が対立して、互いに信頼関係が築けないところでは子どもの教育などありえないと思うのだが。

学校給食や学校行事のいくつかは、子ども救済や娯楽、また地域の人々の交流をはかる目的で生まれたが、今なお同じスタイルで継承されている。まわりが大きく変わっても学校そのものはあまり変わらずにきている。

新しい要望が出るを受け入れ。その中で最大限工夫をはかることが力量ととらえられてきた感じがする。しかし、もうそれも限界にきている。週五日制の話題が出はじめ、ようやく本気で学校教育のあり方が問われ始めてきたからである。この機会に学校のあり方を考えてい

きたい。

(2) 子どもの心を無視して授業はできない

現行の学習指導要領発足の前に臨時教育審議会が話題をまいたが、大きな制度改革にまでは至らなかった。長年かけて作り上げた制度を変えることはかなりエネルギーがいるし、経費もかかる。教育のように人の成長にかかわる場合、急激な改革よりは徐々に変えていく方が望ましいという慎重論が主流である。これについては異論はない。では、現状をより望ましい方向に転換するためには何から手をつけていったらよいのであろうか。

学校の機能を明確にして示し、できない部分は家庭や社会に委ねるとするのがわかりやすいが、人間の教育というものに分業が成立するのだろうか。ある程度大きくなれば対応のしかたも状況で判断できるようになれるが、小さい子どもの場合それがむずかしい。

どの場面でも心を通わせ合って身につけさせたり、できるようにさせたりする必要がある。また子どもも信頼

関係の中で安定した状態でない物事に集中できない。

一人ひとりの子どもの心の持ちようが学習にかかわってくることで、成果にも響いてくることが、学校教育のむずかしさである。心の問題が人間としての普遍性の部分であり、教育改革が進めにくい所以であらう。

三、公教育のこれからのあり方をさぐる

(1) 公教育の新しい課題

親で子どもの幸福を願わないものはいない。今、少し我慢をすれば、先に幸がくると信じて塾にも行かせ受験にも向かわせる。早い時期に安全圏に入れば後は苦勞しなくとも進める。こうした一見矛盾のない説得が多くの親や子ども自身をも納得させてしまう。

それも子どもが小さいほど有効であり、多くの親子が一旦決めるとまっしぐら、こうして進学塾の対象がどんどん低年齢化する。

こうした状況の中では、いくら個性の尊重、真の人間

性とは、と解いたところで虚無感だけが残る。しかし、問い続けていかなければ子どもの成長がゆがめられていく。一時の感傷にすぎない、子どもはもつとたくましい、良い学校に進める方が後々幸せである、との反論も強いが、一生に一度きりの子ども時代にも心やすらぐ楽しい日々を送らせたい。

なぜなら、人生の中で何物にもとらわれずものごとに熱中し、自由なやわらかな素直な心で人や物と出会い、心を動かすことのできるのは何と言ってもかけがえのない子ども時代を置いてほかにないと思うからである。

そしてそれはその後の人間としての生き方にまで影響を及ぼすからである。目覚しい、めまぐるしい現代社会の中で、そんな悠長なことを言っていられないと批判されても、こうした時代こそ現実離れた夢多い子ども心を育てていきたいと願う。小さいうちから、おとな社会の裏表やかけ引きを知らされ、他との競争のみに関心を持ち、目を輝かせ、打算的な判断で行動していかざるを得ない子どもたちに、今こそ真剣に手を差しのべる時

ではないだろうか。現実の厚い壁に向かって、どのような手だてがあるのだろうか。

学校においても親と十分話し合いをしたい。これからの時代を考えると、個の幸福を追求していても幸せにされない。人類に地球規模の課題が次々に出され始めたからだ。環境問題、異常気象や災害、食糧飢饉等々。これまででない諸問題に直面している。

こうした中で本当に必要なのは、視野の広い、奥深い知識に基づいた心情豊かな実践力や行動力が備わった人間であらう。

公教育に携わる者としては環境問題を含め新しい課題に対応できる人間の育成が急務であると考えている。

親も教師も時代の先見性に目を向け、今何をすべきか本気で語り合う時期にきている。

そして、おもに家庭ですべきこと、学校ですべきことの共通理解を持って、互いに相手を信頼して任せることが大切である。

家庭教育と公教育の相互乗り入れが今まで以上に必要

になってくる。

(2)開かれた学校へ

日本の学校はコミュニティの性格を持ちつつ、外部と



は遮断され、独自の特殊な社会をつくってきた。それによって子どもが守られ平等に学ぶ機会が得られた功績は大きい。

しかし、親も自由に出入りできず閉鎖的であったことは確かである。しかも、あらゆる機能を取り込み、単に知的側面の成長のみならず、子どもにとってより望ましいと思われるものはすべて受け入れてきた。そして教育的価値や精神主義的な理由で現代社会においてもほとんど姿を変えることなく存在している。親もそうした全人格的成長の場としての学校の役割に期待している。

これからの時代もこの役割は消滅しないで続くであろう。今後は学習内容の立て直しが求められる。個性重視、こだわりを持つ学習等、個性化教育の方向が強まってくる。

場合によっては、教師だけでは対応がむずかしい。門戸を開いて、専門家や親のボランティアの形等も導入し、協力を呼びかけたらよいと思う。

教科構成、学習内容の見直しと精選といった教育課程

の検討の際にも親のアイデアや子どもの要望も参考にしてみたらよいと思う。

プロとしての教師の沽券にかかわるなどと言うのではなく、教師自身も社会に目を向け、研鑽を積みオーブンマイン드의精神で公教育に携わっていくことが大切であろう。

教育が人間と直接かかわる以上、親も教師も子どもと共に学び続けていく姿勢を忘れてはならないし、その努力を続けていくことをこれからも心がけていきたい。

(お茶の水女子大学附属小学校)

堀合先生に学ぶ(9)

一人ひとりの育ち

立川 多恵子

♡ 朝の出会い

私が園に着いたのは九時少し前だったが、堀合先生はもうテラスで登園してくる子どもたちを待っていた。次々にくるすみれ組の子どもたち(年少組)は、どの子もまっしぐらに先生の待つ靴箱のところへ飛んで行く。先生に出会う嬉しさを全身に表現している子どももいる。一学期には見られなかった光

景である。

保育室ではママゴトをしている子、ミニカーを並べている子、絵を描いている子、部屋の中を歩き回っている子などいろいろである。

裏庭に出たら、さとしとしょうたがバケツに砂を入れて遊んでいた。傍らでしょうじが川を作っている。さとしは先生の姿が見えると、早速「先生、バケツほしいよ」と言う。先生は「バケツね」と言い

ながらあちこち探していたが、保育室に戻って、数個の赤い木の碗を持って来た。そして「バケツはなかったけど、これではどうかしら？」とたずねた。

さとしはその碗を黙って先生の手から受け取ったが、そのまま自分の横において、手元のバケツに砂を詰め込む。おそらく先生の出してくれた木の碗は、さとしのやりたいと思うことを実現するために使えない道具だったのだろう。さとしのあそびは「めあて」がしっかりしている。

♡ 偶然が生み出す遊び

園生活というのは面白いもので、さつき先生が出してくれた木の碗は、さとしの傍らで遊んでいたしょうじを刺激した。しょうじはその碗に興味を持つと、早速手にとって砂を入れて型抜きを始める。

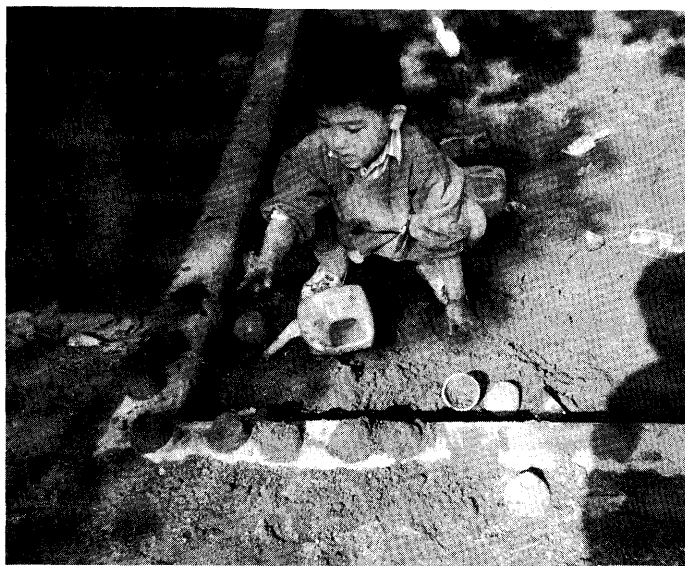
しょうじの作ったプリン状のものが三つ並んだ時、さとしは「それが欲しい」とねだる。ケーキの

飾りにしたいというのだ。しょうじははっきり「だめ」と言って断った。さとしはねだるのを諦めて、しょうたと二人で自分たちで型抜きを始める。しょうじのはっきりした自己表示や、断られたしょうた、さとしが自分たちの思いを自分たちの力で実現しようという姿勢はすみれ組の子どもの育ちを象徴している。

さとしもしょうたも型抜きには馴れていないようだ。さとしは力まかせにお碗に砂を押し込むので、逆さにしてもなかなか抜けない。しょうたの方は逆に軽く入れるので、型抜きしようすると、崩れてプリン状にならない。二人は何度もやり直して、やっと二つ作る。それをさとしがケーキの上に載せる。デコレーションケーキの出来上がりである。

型抜き遊びはどこの園でも入園当初から見られる遊びである。型抜きは「プリンあそび」と言われることもある。子どものやっているのを見て、大人のつけた遊び名である。子どもたちには何か違った意

◀
プリンを作りはじめた



味があるのかもしれない。しかし一学期のすみれ組ではこの型抜き遊びに出会うことが少なかった。先生が教えないからである。堀合先生は子どもが環境と出会って生み出す遊びをとても大切にしている。

♡ 遊びを継続する

しょうじの型抜き遊びに興味を持ったさとしとしょうたが揃って参加してきたので、砂場の縁には四十個余りのプリン状のものが並んだ。そこへ先生がいらして、

「あら！きれいに並んだわね、全部並んだら一番美味しそうなのをいたどうかしら」と言う。先生も食べ物想定しての発言である。先生はしばらくしゃがんで、子どもたちの型抜き遊びを見ていたが、やがて保育室に戻って行った。

その先生の後を追ってしょうたも保育室に戻る。砂遊びは出入りが自由である。



▶ 「あら！
きれいに並んだわね」

しょうじとさとしは相変わらず型抜きに余念がない。二人はお互い影響し合っているのだが会話を交わすことはない。さとしの型抜きの技術は長足の進歩であり、もう、抜けなかったり、崩れてしまったりすることはない。しょうじの方は崩れてしまったり直すこともある。

そこへりょうが加わり、しょうじ、さとし、りょうの三人はせつせと自分の作ったものを砂場の縁に並べる。大きな砂場の周りにプリン状のものがずらっと並ぶ。

もう少しで出来上がりという時に、しょうじは突然大きな声で「りょうちゃん、今日遊びにきていいよ」と言う。りょうはしょうじの方を見て頷く。その言葉を聞いてさとしが「ぼくは？」と聞く。しょうじはすぐに「さとくんもいいよ」と応える。その声を聞きつけて砂場にやって来たかずやも「ぼくは？」と聞く。しょうじはかずやの申し出に対して「いいよ」と機嫌よく応える。

型抜きあそびの持続が、彼に充足感を感じさせ、どの子も受け入れるといった広い気持ちを起こさせたのだろう。もう少しで出来上がるというところで、りょうもさとしも保育室に引き上げてしまった。しかししろうじだけが黙々と型抜きを続ける。手つきも大分達者になった。彼はもう失敗することは殆どない。最後の一個を作った時、しろうじの頑張りに感心して、私は「とうとうやったね」と声をかけてしまった。型抜き遊びは外側からでも子どもたちの努力の見える活動である。

その時タイミングよく保育室から出てきたさとしが、「できた！ できた！」と大声で叫んだ。そして大急ぎで保育室に戻っていった。先生に報告するつもりだろう。完成したしろうじより、さとしの方が喜んでいる。

しろうじはさとしを追うようにして保育室に戻っていった。そこで私もそのしろうじの後を追って保育室に戻ったが、そこには先生の姿は見えなかつ

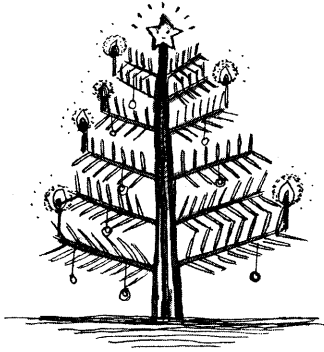
た。

さとしは先生を探してホールに行く。しろうじはテーブルの前の椅子に掛けて、ウルトラマンのお面を描き始めた。さとしが先生を見つけて報告したのか、保育室に戻ってきた先生は、他の子の世話をすると早速、砂場に行った。そして「ほんと！ 並んだわね」と言いつた。その言葉を聞いてさとしは得意そうだった。私はしろうじがその場に合わせたら、どんな表情をするだろうかと考えてみた。しかし、しろうじはすでにお面作りという次の活動にとりかかっていた。型抜き遊びで得た充足感が、安定した気持ちで次の活動に取りかからせたにちがいない。

今日のしろうじのあそびの持続性はたしかに目を見張るものがあつた。しろうじにはこの時期それが必要だったのだろう。すみれ組には子どもにとって必要な活動の出来る時間と空間が保障されている。

しろうじのことはすでに本誌の四月号で紹介して

いるので、覚えている方もいるかもしれないが、入園当初であったが、彼は降園時間になってママゴトをやり出して先生を戸惑わせたことがある。その時先生は「遊び始めるのが遅かったからね」とつぶや



いて、ママゴトを止めさせないで待ってやった。しょうじはそのため納得するまで遊んで、自分からお帰りの列に入って行った。こうした配慮はその後の子どもの園生活にとって大きな影響をもたらすと考える。

♡ 子どもが変わる

私がしょうじに初めて会ったのは、入園二日目のことだった。その日、しょうじは年長組の子どもから砂をかけられるという災難に会った。しょうじにはその年の三月に十文字幼稚園を卒園した兄がいた。その友達が朝から何度もしょうじを呼びにきていたが応じなかったで、しょうじが園庭に出たのを幸いに砂をかけられてしまったのだ。目の前でしょうじが砂だらけになったので、私はあわてて止めに入っただけを覚えている。

先生のお話ではしょうじはその翌朝から登園を渋

るようになったという。五月の始め私が久し振りですみれ組を訪ねた時も、先生はしょうじを抱くようにして保育室に連れてきた。それにもかかわらず、彼はすぐ逃げだしたので、先生はあわてて追いかけて、再び抱いて戻ってきた。それが六月になって、嫌がらずに登園するようになったので、「しょうじちゃんは嫌がらずに登園するようになりましたね」と先生にお話ししたことがあった。

先生は「入園当初は門が開いていたので、飛び出されて事故にでもあったら大変と考えて、必死で連れ戻していましたが、どうもいい気持ちがないのです。この気持ちはしょうじさんも同じだろうということに気づいて、もうしょうじさんを引き止めるのはやめようと思ったのです。そうしたら不思議です、その日からしょうじさん、登園しても自分で保育室にくるようになったのです。そこで私もそれからしょうじさんの気持ちにまかせようと思ったんです。子どもを変えようと思ったら保育者の方が

変わる必要があるんですね」と語ってくれた。

先生は「最近やつとしょうじさんが私に心を開いてくれるようになりました」と話していた。それは型抜きあそびが続いた後のことである。子どもが心を開くようになるのは、安定できるようになった時である。あの日の型抜き遊びの充足感はしょうじの気持ちの開放に役かったものと考ええる。こうした日々の生活の小さな経験を通して子どもは育っていく。

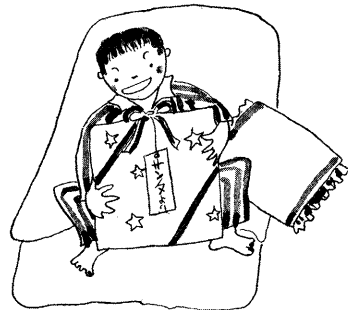
(十文字学園女子短期大学)

〈本の紹介〉

『幼児の笑いと発達』

友定啓子著（勁草書房）

内藤 知美



ジャングルジムに登ろうとして、K夫は、手をすべらせ、ドンと尻もちをついた。大声で泣き叫ぶK夫。が、次の瞬間、シーソーまで全速力で駆け出して、ニーツと笑ってこちらを振り返った。

子どもの表情は多様で、めまぐるしく変化するが、その表情の中でも、子どもの笑い顔はとりわけ魅力的である。赤ちゃんの笑い顔をみたがために、思わず百面相に夢中になった経験

をもつ人も多いのではないか。

子どもたちの世界を見ると、笑いに満ち溢れ、笑いの息づかいが絶え間なく聞こえてくる。子どもの世界は、笑いの中に成立すると言える。それは過言であろうか。本書のテーマは、この子どもの笑いにある。「幼児にとって笑いとは何か」。一見壮大に見えるこの問いを、扱いつつも、子どもの笑いの世界に触れ合い、常に眼前にその世界を見ている著者には、力み

や気負いは感じられない。

著者は、何よりも保育を、子どもと大人の織りなす生活世界の現象として捉え、子供との間に育まれた共感性の下に、子どもたちの「笑い」を掬い上げる。「自分の順番が来るのを待ちきれずフハハと噴き出してしまう二歳児E子」、「柵につかまって、自分の力で立ち上がりニースと笑った〇歳児X夫」、「雲の切れ間に射し込んできた陽の光りに、『あーっ』と声をあげた一歳児C夫」など、ややもすればこぼれ落ちてしまいそうな笑いのディテイルを描き出すことによって、子どもの発達のプロセスを探る。からだと結び付く笑い、知的な認識に伴う笑い、人間関係の構築に伴う笑いという三者を主軸にしつつ、相互に関連するそれら三者のダイナミズムの中に、発達の過程をたどる。

本書によれば、その過程は次のようである。

子どもは、笑いの表情と共に、心とからだの共

鳴動作を楽しみ、わかる喜びを享受し、異質な世界を取り入れる。時には、「おしり」「うち」といったからだのタブーに関わる「笑い」を巧みに使いながら、相手との親和関係を樹立し、確認しようと積極的に働きかける。人との関係、集団との関係の中で、子どもは、嘲笑というような攻撃性をもつ笑いの意味を読み取り、あるいはそれをコントロールすることを学ぶ。やがて、子どもは、笑いの社会的・文化的な機能を理解し、笑いは複雑で多面的なものとなる。

本書では、「笑顔の下に、自分自身に出会い、他者に出会い、この世界に出会い、その中でいかに自分自身をつくりあげていくか」という自我の形成のプロセスが、確かな観察力で捉えられている。保育者として、子どもと共に生活世界を創り上げながら、笑う主体としての子どもひとりひとりの世界の中で、その笑いの意

味をくみ取り、そこに理論的な枠組を見いだそうとする著者の真摯な態度が行間から浮かび上がってくる。不断に問いつづけるこの著者の姿に、幼児理解の在り方が示唆されているように思えた。

加えて、読み手を魅きつけてやまないのは、本書の笑いに対する視野の広さであろう。笑いが全人格に関わるものであり、「人間らしさ」の根源であるという著者は、笑いを通して「子どもの生の姿」を細部で捉えつつ、文化・社会の視点を絡ませ、笑いを全体として捉えようと試みる。

本書を読みすすめる中で、子どもの笑いの世界に引き込まれ、その笑いの意味を共に問いつつ、時に、「近ごろ笑わなくなったなあ」などと、自身の生活の問題として、新たな問いを投

じたくなるのは、この所以であろうか。子どもの笑いの豊かさが途切れるとき、大人の世界の豊かさも危うくなる。また逆もしかりであろう、などという思いに駆られつつ、頁をめくる。本書からもれてくる子どもの笑い声は、軽やかでありながら、しかも、大人の世界に深い揺さぶりをかけてくる。

自己と世界のつなぎ手として立ち現れ、人との関係を深める笑い。時には、自己の危機的な状況を回避する最後のとりででもある笑い。子どもの笑いに注がれる著者のまなざしには、人間に対する静かで熱い思い―存在に対する肯定の態度とでもいえようか―が映し出されているように思えた。

（お茶の水女子大学大学院）

婦人宣教師、ミセス・ブラインの 「おばあちゃんの手紙」(11)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林 恵子

二四

横浜 一八七五年一月二十日

私の愛する小さなキティーへ

今日はどんなことをあなたにお話すると思いますか？ 私たちのホームにも小さなキティーがいるのですよ。どうして同じ名前の子がここにいるかお話ししましょうね。

初めに言っておきますが、日本人の多くは豊かではなく子どもを育てるのにお金がかかるので子どもを欲しがらないということです。それに、子どもが生まれると母親は田畑にでて働くことが出来ないし、また、他人の家に雇われている奉公人で妻のいる男たちの多くは妻に子どもが生まれることを許さないのです。なぜなら、これまでのように妻が働いて夫を助けることができなくなるからです。

私たちのホームで働いている使用人の男たちも同じ考えでしたが、私たちと一緒に暮らしているうちにその考え方は良くないと思うようになりました。

そして、子どもは神さまからの贈物だから両親は喜ぶべきことで、子どもたちをよく世話してあげなければならぬというように子どもの誕生について使用人たちの考え方がずいぶん変わってきたのです。

さて、使用人の一人で「べっとう」と呼ばれ（馬丁、御者のこと）私たちの年取った馬の世話をしている男がいます。この人はホームに來た最初の頃はあまり良い人ではありませんでしたが今ではまったく人が変わったようになりました。そして、私は彼が神を愛し仕えることを学んで欲しいと願っています。先週、神様は彼の家庭に可愛い女の赤ちゃんを恵んでくださいました。そして今、彼は赤ん坊と与えられたことの喜びを感じ、これ以上幸せなことはないというほど幸せなのです。なんと彼は赤ん坊のために小さな家から外へ出たがらないほどなのです。彼は赤ん坊と離れてはどこへも行きたくないと言うのです。

彼は以前には子どもを育てる時間もなければお金

もないので赤ん坊は欲しくないと言っていたのですよ。でも、今はよい家庭とよい友だちに恵まれ本当に感謝しています。そして子どもが生まれた次の日、彼は私の部屋にやって来て日本人がいつも敬意を示すときによくやるように額を床にこすりつけ、何度も何度も赤ん坊のお礼を言って私に赤ん坊の名前をつけて欲しいのです。

私はちょっと困りましたが、とうとうメアリーやパーティーやあなたが一緒に写っている可愛い写真のはいつている額縁を彼に見せ、あなたの顔を指さしてアメリカに住んでいる小さな孫の女の子と同じ名前をつけるのはどうかと尋ねました。彼は「キティー」という名前を言ってみて何度か行ったあとで、その発音がとても上手に言えるようになりました。

彼は大変喜んで「ありがとう、奥さん」「おおきにありがとう」と日本語で何度も言い続けました。これはとても感謝しているという意味なのです。

赤ん坊のキティーはとても可愛くてこれまで私が見た日本の赤ん坊のなかでは一番愛らしくて、あなたと同じように白い肌をしているのです。いつか、この赤ん坊の写真を写して送りますよね。きっとあなたに喜んで貰えると思いますよ。

この赤ん坊の父親はホームの女の人たち全部にどうしてキティーの名前がつけられたかを話し、その子の名前をいつも呼んでいました。そして彼は「私の家のキティーもやがて、このピアソンさん（ミセス・ブラインと一緒に日本に來た婦人宣教師の一人、初代校長）の学校に入るでしょう。そして神様に守られ賢い女性に成長し、良い事を沢山するようになってほしい」と言いました。

今、私があなたにお願いしたい事はあなたと同じ名前の子の赤ちゃんのために祈ってほしいことです。神さまが私たちの祈りを聞いてくださることは知っていますね。あなたが祈ったとき、神さまは可愛い妹を与えて下さったでしょう。神さまが祈りに

答えてくださることを信じてこの小さい日本の子どものために祈って下さい。今、これがあなたに出来ることです。でも、この子が私たちの学校に入るくらい大きくなったら多分あなたがこの子を援助するようになるでしょう。

神さまはこんなに沢山の愛らしい小さな子どもたちを私に与えて下さいました。アメリカの私自身の故郷の家だけでなく、日本でのこのホームにも。そして、子どもたちみんなが私を愛してくれているのです。この子たちが私のそばにやって来て私の腕の中に何人はいれるかやってみようと言っているのをあなたが見たら、きっと面白がるでしょうね。もし、主イエスがあなたたちみんなを主の牧場の小羊としてすべての危害や罪から安全に守り導いて下さっていつか私たちが天国の神の玉座のまわりに集まることができたら私はどんなに神を賛美することでしょう。

故郷の皆さんたちに心からキスを送ります

おばあちゃん

*

二六

横浜 一八七五年六月二十日

愛するメアリー、バーティ、キティーへ

…まえがき、略…

さて、今日は私たちが山の方（箱根）へ旅したときのこととそこで私が経験したちょっと怖い出来ごとをお話ししましょうね。

山道に行くには「かご（駕籠）」という乗り物に乗って行くということは前の手紙でも書きましたね。そして、「かご」は日本人のように足を折って座ることに馴れていない私たちにはどんなに辛いものかという事も書いたでしょう？ それで、私はこの「かご」に手を加え、もっと楽な乗り物にしようと考えたのです。それで大工さんと呼んで普通より

ずっと大きな「かご」を私のために作らせたのでこれまでの「かご」とはかなり違ったものになり、乗り心地のよいものになりました。でも、日本の人々がどんなに昔からのやり方を堅く守り続けてきたかという事は知りませんでした。もし、それを知っていたらこうした改造はしなかったでしょうに。

ある日、私たちは十マイルほど離れた箱根の山の方に滞在している何人かの友だちに会うため、グループをつくりました。そこは素晴らしく景色のよいところですが険しい山なのです。仲間の一人の男性が私の「かご」を見て「大きな東号」と名づけました。私は他の人々が小さな「かご」に窮屈そうに座っているのを見て、私の「かご」はとても乗り心地がよいと言って鼻たかだかでした。私は他の人たちにも時々私の「かご」に乗せてあげましたが、ちょっと利己主義かなと思いました。

途中、私たちは沢山の硫黄の温泉が噴きでている小さな村を通りました。大きな温泉宿も何軒があり

ました。これらの山を登っていく途中には温泉場が沢山あってこのお湯で病気を治療しようと日本各地から人々が来ているのです。そこには多くの身体の不自由な人々や病氣の人々がいて、その光景は何とも悲惨でした。おそらく、この国のように身体じゅうおできや湿疹などの傷をもつ人の多い国は世界じゅうどこにもないのではないかと思います。これもみな人々の悪い生活習慣によるのではないかと考えます。…略…

私たちが山道をそれほど行かないうちに雨が降りだしました。そして、温泉宿のある「芦ノ湯」に着いた頃はどしゃぶりでした。また風がとてもひどかったので私たちをかついできたかごかき人夫たちは足をすくわれ歩くのも大変でした。山道は非常に狭く、やっと歩けるほどの小道だったので大雨が降るとそれらの道はたいがい水路か溝のようになって水が勢いよく流れるのでかごかき人夫にとっては大変なことだったのです。その上、気の毒にも雨で足

もとが見えなくなり、どこをどう歩いているのか盲めっぽうに行くよりしかたがなく深い水のなかに足をつっこんで時々とがった石をふんでしまうこともありました。この人たちは靴をはいていないのでどんなに大変だったかあなたたちにも想像できるでしょう。

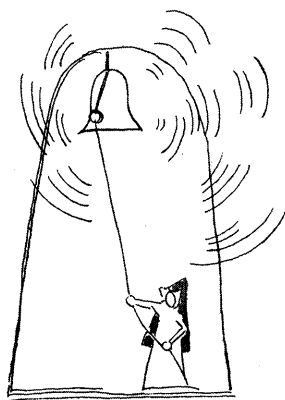
私たちが友だちの滞在している「木賀（キガ）」温泉の近くに來たとき、有難いことに雨が少しの間やみました。雨よけのため「かご」に大きな油紙をかけていたのでこれまで景色が見れなかったのですが、油紙を取り除いたとき、私たちは驚くほど雄大な美しい山の景色に驚きました。

私たちが通って來た山道は「木賀」温泉のすぐ近くまで山頂をとり巻くようにぐるぐる渦巻き状に続いているのですが、ある場所で突然、視界が開け五百か六百フィートくらい下の谷間に小さな美しい村がひろがっているのを眺めることができました。木々の緑の間に見え隠れする小さな蘆葺の家、しゃ

れた縁側のある茶屋、このどしゃぶりの雨で水かさの増した無数の噴流が岩々の間を荒々しく雄大に流れ落ちるさまなど、本当に美しく、生涯忘れられない思い出になりました。このすばらしい景色を見た事と友だちが大変歓迎してくれた事で、あの「芦ノ湯」で私の心を悲しみで一杯にした人々の悲惨な光景からどうやら開放される事ができました。

友だちが用意してくれた西洋式のなつかしい夕食をご馳走になったあと、私たちは帰ることになりました。ところが、この帰り道に「大きな東号」のかごに乗った私に大変な災難がふりかかってきたのです。

雨は又どしゃぶりになってきました。こういう雨はこうした山々に特有のものらしいのです。そこで私たちは再び油紙ですっかり覆われ、ぬれねずみになるのをさげなければなりません（日本で作られているこの油紙は大きくて柔らかく、こうした水よけなどのためにとっても重宝されているもので



す）。これまで私の「大きな東号」を担いでいたかごかき人夫たちは何事もなくなりましたが、この後、この人たちは全く違った面を私にみせはじめたのです。私たちが出発して間もなく、私のかごかき人夫たちは言いだしました。「奥さん、チップをはずんでくれませんか、この「かご」はえらく重いのですよ」「あつしや足がびっこになっちゃって、もうこれ以上歩けませんや」それからは少し行つては「かご」を地面におろし、また少し行つては「か

「ご」をおろし、「かご」のたれ幕を上にあげて私にチップをくれとしきりに要求するのです。

私はこの人たちにお金をあげるのはどうかと思いましたが。というのは、これらのかごかき人夫たちと交渉してくれたブラウン博士へ註1Vからお金は渡さないようにと言われていたからです。それで私は財布を持っているのをこの人たちに見せないようにしていたのです。やがて、私は自分の「かご」が皆の一行からずっと遅れてしまっていることに気がつきました。私はだんだん不安になってきました。

そこで私は他に何かよい方法はないかと考えました。最初に私はクラッカーの包みを彼らに分け与え、それから「向こうへ着いたら、チップをあげましょう」と言いました。でも、人夫たちは要求する事を止めないばかりか早く歩こうともしないので。正直に白状すると、私はだんだん恐ろしくなってきたのです。前方に行く他の「かご」かき人夫たちのかけ声も聞こえないし、今はもう皆の「かご」

がはるか遠くに行つてしまつて見えなくなっているのです。あたりは、すっかり暗くなり雨は相変わらず激しく降っています。私の心臓の鼓動がいつもより早く打ち、何か大変なことがこれから起こるのじゃないかとふるえていたのも無理ないでしょう？

でも、これまで私は日本人についていくらか学んできたのです。ですから、この人たちは大変貧しいからこんな事をするので、何か特に彼らを怒らすようなことをしなければ実際に危害を加えるような人たちじゃないということを知っていました。そこで私はつとめて平静をよそおい、父なる神にこんな状態のときにはどうしたらよいか助けて下さいと祈つたのです。

人夫たちはしつこくせがみ続けました。そこで、ついに私は木質温泉で買ってきた桃の箱を開け、彼らに分け与えました。木質は日本で最もおいしい桃の産地なのです。暗くて何も見えなかったのですが、この人たちが私のあげたおいしい桃を食べるの

を見て――いいえ、桃を食べる音を聞いてですが――私はその桃が留守番をしているホームのみんなへの土産だっただけに心が痛みました。

今まで私がやった事は全部ダメだということが判ったので私はついに彼らにお金をあげるしかない
と決意した丁度その時、たいまつが見え、他の人夫たちの呼ぶ声が聞こえたのです。他の人々はみんな箱根に着いて、私に来ていないのに気がついたので。そこで、人夫たちに竹でこしらえた幾つかの大きなたいまつを持たせ、私をむかえによこしてくれたのです。

私がどんなに喜んだか、あなたたちにも想像できるでしょう。小さな山小屋にやっと到着して、私たち全員が集まって夕べの祈りをささげた時、私は今日一日の楽しかったこと、嵐と暗やみの山のなかで「大きな東号」のかごに乗って孤独で怖い思いをしたこと、そこで神の愛によって守られたことを天の父なる神に感謝したのでした。

愛を込めて おばあちゃん

初めの手紙は故郷にいる孫のキティーにどうして同じ名前のキティーという女の赤ちゃんがこのホームにいるかといういきさつを知らせたものである。そして、是非この赤ん坊のために祈ってほしい、学校にいくようになったらこの子を援助してほしいとも書いています。

ところで、ホームの宣教師たちは子どもや少女たちを教育しただけでなく、ここで働く奉公人たちにも大きな感化を与えたことは『横浜共立学園一二〇年の歩み』の書に「特筆すべきことはホームの使用人全員がクリスチャンになったことである」と記されている。八註2▽ホームでは日本人のための祈禱会が開かれていたが、宣教師たちの信仰者としての日々の生活がなにより彼らに感化を与えたものと思われる。手紙のなかでは馬の御者をしていた奉公人の男の家庭に女の子が生まれ、彼がだんだん変わっていく様子が面白く読みとれる。子どもは

親の所有物のように考えていた当時であって、子どもは神からの贈物で両親は子どもを大切にゆく世話してあげなければならぬというキリスト教に根ざした考え方―フレーベルの教育精神と通じる―に変わっていったことは子どもに対する親の姿勢を根本から変革するものであった。

残念な事にこの赤ちゃんはまもなく病死し、ホームで葬式が行われ百人もの大人や子どもたちが出席したことが後の手紙（二七）で書かれている。そしてミセス・プラインは悲しみとともに赤ん坊のキティーの死によってホームのみんなが天国でのよりよき生活について学ぶ機会を与えられた事をその手紙で記している。

次の手紙は箱根に旅したときの体験を書いたもので読み手もドキドキするようなスリルのあるお話である。言葉もわからぬ異国の地であって嵐と暗やみのなかでチップを要求されるのはどんなに恐ろしかったことであろう。「かご」を工夫して改造したというミセス・プラインは進取の気性と勇気のある女性であったと思われる。

昔から「箱根の山は天下の険」と歌われたが明治の初めに「かご」で登った箱根温泉の様子など、険しく美しい山々の姿とともに昔の温泉場をかいまみる思いがする。一緒に同行した人々は横浜に住む宣教師たちや家族であったと思われる。手紙のなかにでてくるブラウン博士は横浜二二二番地のホーム（現・横浜共立学園）の隣地に住む宣教師であった。

（国立音楽大学）

△註1▽ブラウン博士（一八二〇―一八八〇年）

Brown, Samuel Robbins 一八一〇年、米国コネティカット州生まれ。安政六年宣教師として来日、ヘボンと協力して日本語研究、伝道、聖書翻訳に従事。横浜二二一番の自宅にブラウン塾を開き伝道者の養成にあたる。

△註2▽『横浜共立学園一二〇年の歩み』横浜共立学園 五

四頁 一九九一年発行

ある日の育児日記から

(36)

佐藤 和代



われてるみたい。自身ないから、比べられたくないのに。そして最後は必ずこう言われるのです。「個人差ですから心配いりません。あんまり、よその子と比べないようにね」はいはい。

「できるじゃないの。お母さん、あんまり子どものことみてないでしょう」：あはは、すみません

健診というのはどうも苦手。子育てに点数つけて、全国平均からこれくらいはずれてます。と言

すると先生は、犬や車の描いてあるボードを見せて「有くん、ワンワンはどれ?」。有はさっと犬を指さしました。「ブーブーは?」今度はちゃんと、車をさします。えっ、できるの?

というお母さんはみんな、子どもに絵本を見せて「ワンワンどれ?」ときくものなのかしら。そんな知能テストみたいなこと、してみようと思えつきもしなかった私って、変わっているのかなあ。

先日、有の一歳六か月児健診へ行ってきました。体重よし、内科オーケー、そして発達相談。ここで、「有くんは、絵本を見せて、動物や物の名前を言うと、それを指させますか。」ときかれました。しばし考えてから、「できません」。

と、思わずあやまってしまった私です。でも、家に帰ってから素朴な疑問がわいてきました。世の中のお母さん



若いお母さんたちへ

我が子らの夜泣きや 母離れをめぐって

小 蘭 江 幸 子

我が家の三人の子ども達も、この四月で、それぞ
れの生活の節目を迎えることになった。六歳の祐子
は小学校に入学、三歳の章博は、幼稚園の年小組
に、一歳七か月になる匡博は週に三時間ほど、近所
の乳児院で過ごさせてもらうことになった。その
間、私は保健所の四か月健診の心理相談のお手伝い
をさせていただいている。末っ子の匡博は、今ま
で、母親と離れて過ごす時間ということが全く無
かったので、どのようにして、乳児院での半日を受
け入れるようになるのか、見届けるのが楽しみでも
あり、不安でもある。

匡博は、今までは、ごくたまに私のよんどころの
ない外出のために、父、姉、兄とともに留守番をす
る時には、私を追いかけて、数分間泣き続けていた
そうだった。しかし、ごく最近になって、父親と姉兄達
が買物や公園に出かける仕度を始めると、自分の靴
を両手に持って追いかけるようになった。そんな時
には、母親を家に残して自分が外出する事は、簡単

にできるようだ。一歳半を過ぎたのに、断乳がまだできていないことが、母親と離れがなくなっている要因だと父親は主張する。確かに、夜間に、たいへん頻繁に泣くので、私の体力のこともあり、断乳できずにいる。乳首を口に含ませてやることで、安心して眠りにつく匡博のようすを見ると、この安心感を与えるための授乳を、どうしてもやめる気持ちになれない。暖かい季節になって匡博の眠りが深くなり、昼間の外遊びもふえて夜間ぐっすり眠るようになるまで待ちたいと思っている。

第二子の章博のほうは、むしろ、人見知りのほとんど出ない子どもだった。五か月と七か月の時に一度ずつ、来客の顔を見て泣き、月に何度か、保育園で過ごす時にもはじめの数回、私を追い求めて泣いたけれども、保育園での楽しみに気持ちが移っていくのも早い子どもだった。生後すぐから、章博は、夜の眠りにつく時を、父親の手に委ねてきた。それは、姉になったばかりの祐子が眠りにつく時間だけ

は、母親を独占させて気持ちを満たしていこうとしたためである。章博にとって、たとえ父親であつても、世話をし、安心感を与えてくれる人がついているならば、それほど問題になることはないだろうと、夫と私の間では話しあっていた。

また、章博は、もの心つく頃から、好奇心をあらわにする性質で、何にでも興味を示していた。未知の物、事柄に対して、あまり不安感を持たないで関わっていく。祐子の幼稚園の通園に、章博も一緒についていったのであるが、好きな固定遊具や動物が目にはいると、私の方はふり向きもせずに遊びに行ってしまう、母親の存在など忘れてしまっているように感じられることがあった。私の方は章博を、捜し回っているわけで、いわゆる迷子という状態である。やっとみつけ出した時にも、私を捜し求めて泣いているということはほとんどなく、割合に平気な様子であることが多かった。いわゆる人見知り反応が少なかったこともあり、母子間の心のつな

がりが弱いのではないかと、心配にもなった。けれども、今、考えてみると、三人の兄弟の中でも、私との心のつながりは、強いほうではないかと思える。そして、最近になってやっと、自分から、母親を捜し出して、帰って来るようになった。玄関のかぎをはずして、外に出、自宅の周辺で気に入ったあそびをした後、必ずもどって来るという安心感も持てるようになった。

実は、この章博も、一歳をだいぶ過ぎてても夜泣きの激しい子どもで、夜中に一、二時間ごとに泣き、乳を含ませることで夜泣きをおさめてきたので、やはり断乳は遅くなってしまった。一歳三か月の時に、春を迎えて、暖かくなったおかげで眠りも深くなり、やっと、断乳もできたのだった。章博は、ほとんど、不安がる様子もなく何でもやってしまう、どこにでも母から離れて行ってしまいう子どもにみえたが、ことばや態度で表現しようのない、不安やいらだちがあったのかもしれない。それが夜泣きとい

う形であらわれていたのではないかと思うのは考えすぎだろうか。

初めての幼稚園生活にとびこんで、章博は、お友達への興味や関心の表現のしかたがわからずに、追いかけてまわしたり、ちょっかいを出してさわぎをひきおこすこともあるようだ。がしかし、おそらく、すぐに先生を大好きになるだろうし、仲良しになるきっかけをつかめれば、心のつながるお友だちが増えていくのではないかと、楽しみでもある。

さて、第一子の祐子であるが、彼女は、お座りができるようになって、両手が自由になり出した頃から、ひとり遊びをよくする子どもで、私が、十分間位、二階にあがって干し物をしてきても、気嫌よくおもちゃをなめまわしているような子どもだった。だから、隣家の祐子の祖母のところへ、私が用事をしに行ってもひとりで遊んでいられるように見えた。夜泣きもなく、十か月ですんなりと断乳に成功している。しかし、一歳二か月でひとり歩きができ

るようになった頃から、どこまでも私を追いかけて来るようになった。祐子の二歳すぎの時に、私が章博を妊り、入院のための数日間の不在には、父親、祖母とすごした。入院の意味や、日数などを、祐子にもよくわかるように話してみたが、私の不在の間、父親たちをそれほど手こずらせるでもなく、すごせたようだ。しかし、その後今日に至るまで、ひとりで留守番など、絶対にできない、死ぬほどこいやだと、拒否しつづけている。それでも母親のかわりに、父親がいたり、幼稚園生活では、担任の先生が、すぐに母親にかわる存在となったので、何の支障もなくすごし、卒園した。

最近、ひとりで、近所の商店街まで買い物に出かけるようになった。「お母さんついて来ないで」と念を押し、肩で風を切るようにして出かけていく、そして、また、私に、ピアノの練習に誘われるのを避けるようにして、私の目の届かない所に人形一式を運びこみ、時には章博も誘って、二階での

ごっこ遊びに興じている。「お母さん、買物に行ってきたいいよ」と、祐子が留守番を引きうけてくれるのも時間の問題ではないかと、今からとても楽しみにしている。

ところで、毎週日曜日、朝日新聞の家庭欄に、「おはなし、おはなし」というテーマで河合隼雄先生が、エッセイを連載しておられる。お読みなった方も多いと思うが、二月二十一日の「魔法のまど」と題するお話は、大変に興味のひかれる内容だった。その部分を抜粋しておこうと思う。

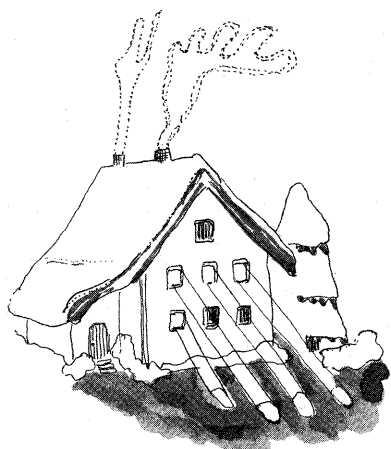
——最近亡くなられた井筒俊彦先生が次のようなことを書いておられた。われわれは通常は自と他とか、人間とぞうとか、ともかく区別することを大切にしている。しかし、意識をずうっと深めていくと、それらの境界がだんだん弱くなり融合してゆく。そして一番底までゆけば「存在」としか呼びようのないような状態になる。そのような「存在」が、通常の世界には、花とか石とか、はっきりとし

たものとして顕現している。従って、われわれは「花が存在している」と言うが、ほんとうは「存在が花している」と言うべきである、というのである。

「存在が花している」という表現は、私は大好きである。そして、まどさん（詩人のまどみちおさんのこと）の詩を読んでいるとその感じが、びたっとわかるときがある。まどさんの詩に出てくる、花や石や、ぞうやのみななどに合うと、「あれ、あんた花やってはりますの。私、河合やってますねん」と挨拶したくなってくるような気がするのである。根っこでつながっている感じが、実感されるのである。

これを読んで、私の中に、きわめて鮮やかによみがえって来る私自身の幼児期の体験がある。おそらく、三歳か四歳位から始まって十歳位まで、消えてはあらわれたように思う。それは、美しい花とか、木の枝とか、空の雲とか、自然界のすてきな物に、心を奪われるほど見とれている時に、私の中に突然

に、おこるのだった。「私は花ではなかった」「私は雲ではなかった」「私は私という人間だったんだ。花とは違う、たったひとりの人間だったんだ」という覚醒のような感覚なのである。そしてそれは、この世にただ一人という、たいへんな寂寥感、孤独感が、押しよせてくる感じで、足もとをすくわれてころんでしまわないように、足をふんばり、身を固くして、それが通りすぎるのを待つしかなかった、そ



のたびに、「私は、私だったのだから、何でも、ひとりりで考えなくては、ひとりりで決めなくては、どっちへ歩いていくのか自分で考えて、自分で足を動かさなくてはならないんだ」ということを、必ず、思い出させられるのである。美しい物、気に入った物と一体となって一緒に酔っていたのが、急に、分離し、独立した存在であることに気がついて、世界中から孤立してしまったような、見放されてしまったような感じを持ったということなのだろうと思う。ということとは、覚醒の感覚をとりもどす前の状態というのは、見とれていた物と自己の意識は、混然となつてほぼ一体化していたのではないだろうか。今になって考えると、その覚醒の感覚というのは、温かく、頼りになる存在、自分を守り包み込んでくれる存在と自分が、一体だと思っていたのに、突然、違った存在、各々独立した存在だということに気がついてしまった、というように言えるような気がする。二歳から三歳にかけて、主な養育者

が、祖母から、実母に移行したことと、何か関連があるのかもしれない。

このようにして、自分の幼い頃のことを、思い出してみたりすると、一歳と三歳の我が家の男の子達の夜泣きについても、私の体験した寂寥感とは違っているかもしれないが、ある種の感覚が伴っているのではないかと思ってみたりする。断乳を急いだりせずに、くり返される夜泣きをなだめながら、自然に泣かなくなるのを待とうと思う。章博がやっと尿意を伝えられるようになったのが、三歳直前だったが、一年以上の間、汚れたパンツを洗い続けながら、母としての試練に耐えること、待つことのできる幸せも味わわせてもらった。子育てという、この重い役割りを与えられている幸せを、感謝の気持ちで忘れずに全うしたいものだと思う。

(はるにれの会)

幼児の教育 第九十二巻（平成五年） 総目録

◇一号

△巻頭言▽自己価値観を育てる園生活

の創造

河野 重男

国際会議を考える

津守 真

世界市民育成としての幼児教育

宮原 修

「子どもの権利条約」を巡って(1)

本田 和子

庭の番人ゝふゆゝ

土橋 光子

光、生命のいぶき

岩上 節子

第45回保育学会報告 新しい歴史学の

動向と保育研究の出会い 森下みさ子

保育への視座(7)

河邊 杲

ある日の育児日記から(2)

佐藤 和代

子どもたちへのまなざし(1)

共感

保育環境としての施設・設備に関する

一考察(3)

永井理恵子

◇二号

△巻頭言▽「ピッチ」または「保育臨

床」のこと

統合保育

第45回日本保育学会講演

高齢化社会と子ども

シチューと大根

あっち向いて：ホイ！

二歳児保育の部屋から

チュルノブイリに健やかな日々を

子どもたちへのまなざし(2)

思い出の紙芝居

松井 とし

松井 とし

間藤 侑

津守 真

原 ひろ子

小口 眞美

田島 敏道

守永 英子

室賀 昭子

松井 とし

松井 とし

松井 とし

松井 とし

松井 とし

松井 とし

松井 とし

松井 とし

松井 とし

松井 とし

松井 とし

都市に浮かぶ幼稚園(3)

他園との交流を通して

ある日の育児日記から(2)

ランチルームとバスストップ アメリカ

カの子どもの本音の世界 入江 礼子

◇三号

△巻頭言▽かんしゃく

原点

幼児期の歯科保健

特集△なおす▽

治る

本を直す

本は利用され続ける文化財

おもちゃを直す

なおす・なおる

土器の復元

吉岡 恭平

吉岡 恭平

吉岡 恭平

足立なぎさ

佐藤 和代

藤原 正彦

津守 真

井上 直彦

宮川 明子

久芳 正和

松尾 達也

田中三保子

吉岡 恭平

吉岡 恭平

吉岡 恭平

吉岡 恭平

吉岡 恭平

吉岡 恭平

吉岡 恭平

吉岡 恭平

吉岡 恭平

自分の健康は自分の手で 堤 喜久雄

保育への視座(8) 河邊 泉

公教育は家庭教育にどこまで関与するか

(2) 保育所の窓からのメッセージ 浪川美知子

ある日の育児日記から④……佐藤 和代

婦人宣教師、ミセス・ブラインの「お

ばあちゃんの手紙」(6) 小林 恵子

◇四号

へ巻頭言へ保育の難しい時代に

関口はつ江

保育の知 深くかわることによって

津守 真

音楽の往来と子供

東洋音楽学会からの報告 永原 恵三

堀合先生に学ぶ(1) 立川多恵子

日本グッド・トイ委員会からの報告

おもちゃに社会性が身につけてきた

多田 千尋

記憶から 榎田 正子

公教育は家庭教育にどこまで関与するか

(3) 保育園と家庭とのいい関係は

続・庭の番人 佐野 洋子

別れの前「子ども」

ある日の育児日記から③ 土橋 光子

婦人宣教師、ミセス・ブラインの「お

ばあちゃんの手紙」(7) 小林 恵子

◇五号

へ巻頭言へ五月に思う

連想 清水 光子

真の学力とは何かを問うことから

障害児の学力観について 関 祐二

OME P世界大会(アリゾナ大会)に

参加して 小川 清実

堀合先生に学ぶ(2) 上垣内伸子

保育への視座(9) 河邊 泉

ある日の育児日記から② 佐藤 和代

保育現場で感じること

自己中心主義をテーマに

子どもたちへのまなざし(3) 上坂元絵里

心の鍵 松井 とし

幼稚園の先生になって 渡辺 知子

若いお母さんたちへ

娘の幼稚園就園を考えて 河合 聡子

◇六号

それぞれに子ども学がはじまる

「子どもの権利条約」を巡って(2) 津守 真

特集へ時間へ

輝く時の喪失 永倉みゆき

心理療法における時間 安島 智子

ダイヤの話 辻村 和人

知恵遅れの子どもの生きている時間

時間 榎沢 良彦

「時」の共有 松木 正子

クリステヴァ、「女の時間」を読む 豊田 一秀

誕生会の一年間 浅井美智子

飛翔する過去の時間 山口 陽子

堀合先生に学ぶ(3) 首藤美香子

ある日の育児日記から③ 上垣内伸子

婦人宣教師、ミセス・ブラインの「お

ばあちゃんの手紙」(8) 佐藤 和代

小林 恵子

◇七号

△巻頭言／保育と保育学の専門性を問う

幼児期の輝きと揺らぎ

森上 史朗
津守 真

今からまいて夏休みに咲かせるアサガオ

浅山 英一

子どもの少ない時代こそ幼児教育の見直しを

渡辺 真一

堀合先生に学ぶ(4)

立川多恵子

菊池先生を思う

村田 修子

保育への視座(10)

河邊 杲

公教育は家庭教育にどこまで関与するか

(4) ありふれた生活を見直すことから

伊集院理子

ある日の育児日記から(31)

佐藤 和代

若いお母さんたちへ

杉本 裕子

弱い母親

◇八号

写真・子供讃歌

△巻頭言／子どもの理解・受容・指導

秋山 和夫

荷物

津守 真

土づくり

特集△緑蔭図書紹介／

子どもたちの△遊び場△を考える

小宮山洋夫
小川 剛

『鳥獣戯語』

皆川美恵子

子どものごっこ遊びを楽しみ、理解するために

内田 伸子

『政治をするサル』他

柴坂 寿子

『ミスエデュケーション』子どもを

むしばむ早期教育』

田代 和美

ベッツィ・バイヤースはいかがですか

入江 礼子

堀合先生に学ぶ(5)

立川多恵子

だいじなことはみんな子どもから教

わった

岩上 節子

子どもたちへのまなざし(4)

デカルコマニー

松井 とし

ある日の育児日記から(32)

佐藤 和代

婦人宣教師、ミセス・ブラインの「お

ばあちゃんの手紙」(9)

小林 恵子

◇九号

写真・子供讃歌

△巻頭言／残日録

輪郭ができること／描画に学ぶ／

日名子太郎
津守 真

「子どもの権利条約」を巡って(3)

倉橋惣三「保育法」余聞(1)

土屋 光雄

保育への視座(11)

河邊 杲

堀合先生に学ぶ(6)

上垣内伸子

Y夫の袋づめ

吉岡 晶子

ある日の育児日記から(33)

佐藤 和代

(5) 本当の連携が始まるためには

田代 和美

◇十号

写真・子供讃歌

ことばを使うこと

津守 真

なぜ幼稚園で運動会をするのか

柴崎 正行

運動会 日常の保育に根ざした行事として

上坂元絵里

第46回日本保育学会報告I

国際化時代と幼児教育

宮原 和子

第46回日本保育学会報告Ⅱ

けんか場面と保育者 中村万紀子
故国を後にして(7) 子どもたちの詩(二)

モーレンカンフふゆこ

堀合先生に学ぶ(7) 立川多恵子

ある日の育児日記から(34) 佐藤 和代

婦人宣教師、ミセス・ブラインの「お

ばあちゃんの手紙」(10) 小林 恵子

◇十一号

△巻頭言▽口と耳のことば 外山滋比古
コロンビアのストリート・チルドレン

津守 真

第46回日本保育学会報告Ⅲ

子どもが「見える」ということ

藤田 博子

動物とともに生活すること 兵頭 直美

生き物をめぐって 高田真由美

保育への視座(12) 河邊 杲

△本の紹介▽『子どもに生きた人・倉

橋惣三』 田代 和美

子どもたちへのまなざし(5)

ある新聞記事から 松井 とし

倉橋惣三「保育法」余聞(2) 土屋 とく

ある日の育児日記から(35) 佐藤 和代

堀合先生に学ぶ(8) 上垣内伸子

◇十二号

普遍性と特殊性

この夏の国際会議から 津守 真

冬空を見上げて 篠原 正雄

「見る」ことについて 榊田 正子

公教育は家庭教育にどこまで関与するか

(6) 公教育と家庭教育のかかわり

堀合先生に学ぶ(9) 流田 直

△本の紹介▽『幼児の笑いと発達』 立川多恵子

婦人宣教師、ミセス・ブラインの『お

ばあちゃんの手紙』(11) 内藤 知美

ある日の育児日記から(36) 小林 恵子

若いお母さんたちへ 我が子らの夜泣

きや母離れをめぐって 佐藤 和代

小園江幸子

第九十二巻総目録

幼児の教育 第九十二巻 第十二号

(一九九三年十二月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成五年十二月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一ー一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五ー一二ー一

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都文京区本駒込六ー一四ー九

振替口座 東京九ー一九六四〇

電話〇三二三九二一七七八ー

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

0～1歳児の遊びが育つ

人間の一生の中で最もドラマチックに発達を展開する0~1歳代の子どもの姿をとらえるもの。

2歳児の遊びが育つ

自由に歩けるようになった2歳代の子どもがいろいろな環境とかかわりながら成長していく姿をとらえたもの。

3歳児の遊びが育つ

集団生活に入りにくい3歳代の子どもの遊びから、友だちづくりと生活習慣の自立と遊びへの姿をとらえたもの。

4～5歳児の遊びが育つ

子どもが興味を持つ遊びの魅力は
 どんどころにあるのか、身近な保
 育の中からとらえたもの。

4～5歳児の遊びが育つ

つぎつぎと変化する子どもの遊びに保育者はどのように関わっていけばよいのかについて考える書。

新教育要領が望んでいる自主性を育てる保育に必要な
援助の仕方と子どもを見る目を養う保育実践書。

年齢別保育実践シリーズ

〈全5巻〉



このシリーズは幼稚園教育要領・保育所保育指針の基本にそって編集しました。現場の保育者、保育者養成担当の研究者の方々にとって「遊び中心の保育とは何か」は重要な課題です。この課題に具体的に応えるため、年齢別保育の実践例を中心に考察を加え遊びの発達が見通せるように工夫しました。

編輯責任 東京学芸大学教授 **小川博久**

定価 各2,000円(税込)

セット定価 6,000円(税込)

セット定価10,000円(税込)

くわしくはフノーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

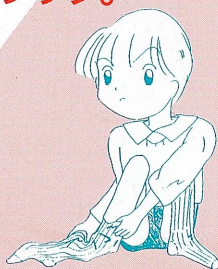
キンダーブックの

フレ〜ブル 鮠

子どもの発達相談

—園と家庭の連携のために—

園と家庭の連携は子どもの発達を正しく理解することからはじまります。そのためのハンドブック。



園と先生と、親とが子どもの育つ姿を正しくとらえ、理解することは保育の第一歩。

90項目のポイントに分かりやすく丁寧な解説をつけた子どもの発達相談です。

先生ばかりでなく、親にもすすめて、ともに読み合うこともできる幅広さをもった育児ガイドブックです。

柴崎 正行・著

A5判・240頁・定価1,800円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

21-2